

---

# ヒメミコ伝 太古の神

神村律子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒメミコ伝 太古の神

### 【Nコード】

N8848I

### 【作者名】

神村律子

### 【あらすじ】

姫巫女流古神道の継承者であり、高校の教師でもある小野藍。その小野家の内紛を伴った宿敵建内宿禰との決着をつけた。しかし、また新たな敵が動き出していた。最強の「光の神」を相手に、勝つ手段はあるのか？

## プロローグ 辰野神教

竜神剣志郎は憂鬱だった。

彼は吉野山で起こった小野家同士、そして姫巫女流古神道と黄泉路古神道との戦いに間接的にはあるが巻き込まれた。

そして職場である杉野森学園高等部の同僚小野藍が、自分には全く恋愛感情を抱いていないと思いついた。まさしく思い込みである。彼は只の一度も藍に直接確認はしていない。

（九州の病院に入院した時のあの一瞬の出来事は、もう遠い過去の話なんだ……）

剣志郎はその後同じ同僚である武光麻弥から告白され、彼女と交際する事に決めた。

何日かが過ぎた。

彼にとってその1日1日は、非常に重苦しい日々であった。

小野藍は職場で顔を合わせると、挨拶はするが、それ以外は決して話しかける事はない。もちろんこちらが用があつて声をかけるとそれに対してはきちんと応対してくれるが、個人的な話には一切耳を貸してくれないし、彼女の携帯に電話をしても出てもくれない。

（藍は武光先生と俺が付き合っている事を知っているのだろうか？）

彼女が嫉妬して口を利いてくれないのか、それはわからない。確かめようもない。そんな事を訊いても、答えてくれないどころか、相手にもしてくれないだろう。

（武光先生が藍に何か言ったのだろうか？）

それも確認していない。いや、できない。それでは、

「私は小野先生の事が気になるんです」

と麻弥に言ってしまうのと同じ事だ。それはそれで麻弥には残酷な仕打ちになる。

「どうしたらいいんだ……」

「悩み事かね？」

剣志郎のしよぼくれた背中を見かねて、声をかけた人物がいた。

「事務長……」

剣志郎は振り向いてそう呟いた。事務長。杉野森学園高等部の事務方のトップである原田裕二は、眼鏡を斜めにつけ、ワイシャツにグレーのベストがトレードマークの、ロマンスグレーの男性である。「何だ、色恋か？」

「えっ？」

いきなり核心を突かれ、剣志郎はギョツとした。原田事務長は呆れ顔で、

「まるで顔に書いてあるようにわかりやすいな、竜神先生は。武光先生とうまくいっていないのか？」

「えっ？」

剣志郎はギョツとした。麻弥との事は学園には話していない。理事長には伝えたいと麻弥は主張したのだが、学園の理事長である安本浩一は、藍の祖父仁斎と旧友で、理事長に話すという事は、藍に話すのと同じだからだ。麻弥は、

「どうして理事長に言っただけじゃないんですか？」

と剣志郎を問い詰めた。しかしまさか、

「藍に知られたくないんです」

とも言えず、

「もう少し待ってからにしましょう」

と理由にならないような事を言っただけで無理矢理麻弥を説得した。麻弥は不承不承頷いた。

「な、何の事ですか？」

剣志郎はそれでも恍ける事にした。もしかすると、事務長が「カマ」を掛けている可能性も考えられるからだ。

「恍けんでもいいよ。武光先生と付き合っているんだらう？」

「はア？」

原田事務長の確信に満ちた物言いは、剣志郎の度肝を抜いた。

「もしかして、内緒のつもりだったのかね？」

事務長は逆に驚いた顔で言った。剣志郎は苦笑いをして、

「いえ、あの、その……」

「腐れ縁の小野先生には話して、私達には話さないのが人として正しい事とは思えないけどねえ」

「えっ、えっ、えーっ？」

剣志郎は仰天した。発信源は藍だと言うのか？ 彼は頭がクラクラした。

「お、小野先生が何か言ったんですか？」

「いや、何も言っていないよ」

「あっ！」

剣志郎は結局「古狸」の異名を保つ事務長に弄ばれてしまったのだ。告白したも同然だった。

「やはりそうか。ま、小野先生は何も言っていないが、ここ何日か、妙に機嫌が悪いのでね。多分そんなところじゃないかと思っていたよ」

事務長の言葉通りなら、丸分かりだったのは自分だけではなく、藍もそうだという事らしい。つまり、いろいろと考えて策を練っていた事が、全て徒労に終わっていたのである。

（この人、俺達の高校時代も知っているんだっけ……。やりにくいなあ……）

その藍は、すでに所用のため帰宅していた。祖父である仁斎の古い友人である遠野泉進とのおのせんしんが来る事になっているのだ。

泉進は修験道の行者で、「現代の役小角えんのおつね」と言われている程の実

力の持ち主である。

「全然記憶にないわ。私が3歳くらいだったんでしょ？」

藍はバイクのヘルメットを脇に抱えながら、社務所の前に立っている仁斎に言った。

「確かに。泉進とは久しく会っていない。年賀状と暑中見舞いくらいしか連絡がなかった男が、わざわざ出羽の山奥から東京まで来ると言うのだから、余程の要件なのだろう」

仁斎は腕組みをしたままで答えた。藍は社務所の戸を開いて、「また何か起こるって事？」

「多分な」

仁斎は先に立って社務所に入り、椅子に腰を下ろした。そして後ろ手に戸を閉める藍を見上げて、

「建内宿禰との戦い、そして舞との戦いで、日本中の気が乱れてしまった。その影響は計り知れない。雅もその事を感じて日本各地を回っていたようだしな」

「雅」という名に藍はピクンとした。昔許婚だった男だ。様々な障害や誤解があつて、今はその関係は消滅してしまっているが、小野一門が決めた事だろうと、自分の意志は反映されていない事だろうと関係なかった。藍は確かに雅を愛していた。幼い恋だったと言われてしまうかも知れないが、彼女が生まれて初めて好きになった男なのは紛れもない事実である。

「雅の話はしないで。私……」

「わかったよ」

仁斎は苦笑いをした。

（いつまでも引き摺っていては埒が開かんぞ、藍。しかしそれは自分で気づかねばならん事。儂がどうこう言うべき問題ではないからな）

剣志郎は帰り支度をすませて車へと歩いていた。先日的事件で壊れたウィンドーの修理も終わり、あちこちにできていたへこみや傷

も補修が完了した。

「竜神先生」

後ろで声がした。麻弥の声だ。剣志郎は何か約束してたっけ、と思いつながら振り返った。

「はい」

「ごめんなさい、私が言い出したのに、『竜神先生』って呼んじゃいました」

麻弥はバツが悪そうに言った。確かに麻弥は綺麗だし、他の男性教師にも人気がある。しかし、剣志郎には彼女の魅力が伝わらない。麻弥はそれを感じていたので、余計に剣志郎に対しては「女」を強調するようにしていた。

「いえ、それは別にかまいませんよ。自分だってそうですから」

「ほら、また敬語。私は年下なんですから、そんな話し方しないでって言いましたよね？」

麻弥は周囲に誰もいない事を知ると、剣志郎の左腕に自分の右腕を巻きつかせるように寄り添った。剣志郎はギクツとしたが、付き合っている者同士なら自然な事だと自分に言い聞かせ、そのままにした。

「わかった。気をつけるよ」

剣志郎はまるでセリフを棒読みするような調子で言葉を選んで話した。麻弥はクスツと笑い、

「無理しないでね、剣志郎さん」

「あ、ああ」

「剣志郎さん」なんて誰にも言われた事がないな、と剣志郎は改めて思った。

「あの2人って、ホントに付き合ってるのかな？」

渡り廊下から2人の後ろ姿を見ていた仲良し3人組の1人、水野祐子が言った。ちよつと横に大きい彼女は、脚の太さが気になるのか、スカート丈が他の2人に比べて長めだ。

「付き合ってるんでしょ、多分」

素っ気ない返しをしたのは、古田由加。クラス1の美少女だと思っ  
ているちよっぴり自惚れの強い子だ。

「あら、由加は竜神先生が好きなんじゃなかったの？」

丸眼鏡をクイツと上げながら突っ込みを入れたのは、事実上のク  
ラス1の人気者、江上波子である。由加はキツとして、

「どこをどう押すとそんな言葉が出て来るのよ！ あんな剣道バカ、  
好きじゃないわよ」

「冗談よ」

波子は陽気に言った。祐子はケラケラ笑って、

「剣道バカは可哀相よ。せめて小野先生バカにしてあげないと」

由加もその言葉に思わず吹き出し、

「武光先生の方が可哀相よね。竜神先生ったら、ホントは好きでも  
ないのに付き合ったりして」

「かもね」

「そうね」

祐子と波子は同意した。

遠野泉進という人物は、まさしく藍の想像した通りの男だった。

誰が見ても「年老いた山伏」という出立ち。そして眼光鋭く、口は  
への字に結ばれたまま。だからと言って威圧的ではなく、慈愛に満  
ちた「オーラ」が出ている。とにかく、不思議な雰囲気的人物であ  
る。

「大きくなつたな、藍ちゃん。以前会った時は、まだオムツが取れ  
ていなかった頃で……」

「はア」

玄関で出迎えると、開口一番そんな事を言われてしまったので、

藍は苦笑いをした。仁斎は笑って、

「まだ似たようなものだ。未だに独り立ちしていないからな」

「何だ、まだ結婚していないのか。こんな別嬪さんなのに」

泉進はその風貌とは大きく違って、只のセクハラ親父に思える程、

言う事に品がなかった。

「ホホホ」

藍は一度もした事がないような愛想笑いをして応じた。

「お前がわざわざ出羽から出て来たという事は、相当な理由があるのだろうな」

居間で仁斎が腰を下ろしながら切り出した。泉進は藍に出された座布団に座りながら、

「ああ。建内宿禰なんぞ可愛いと思えるくらいの途方もないモノが動き出したようなのだ」

「えっ？」

藍は自分が憧れていた京都小野家の椿が命がけで戦った程の強敵だった建内宿禰が可愛いと思える、という言い方が引っかけだったが、泉進は巫山戯ている様子もないので、何が起こっているのかとドキドキした。泉進は仁斎を見て、

「北海道から東北にかけて、数多くの縄文遺跡があるのは知っているな」

「ああ。それぞれ相当の力を秘めた、所謂パワースポットとなっているな」

仁斎も真顔で応じた。泉進は藍からお茶を受け取り、

「その遺跡から、栓を引き抜かれたかのように、神気が消失しているのだ」

「神気が消失？」

仁斎と藍は異口同音に言った。泉進は頷いて、

「遺跡自体は荒らされた様子はない。普通の人間が見ても、何も変わっていないように見える。しかし、明らかに力がなくなっているのだ。何者かが盗んだと思われる」

「そんな事が出来る人間がいるのですか？」

仁斎の横に正座して、藍は思わずそう尋ねてしまった。泉進は藍を見て、

「いる。東北地方に本拠を持つ古神道系の神社がある。その親玉

なら、やりかねんな」

「古神道系の神社？ 初耳だな。何という神社だ？」

仁齋が眉をひそめて言った。泉進はニヤリとして、

「何だ、お前、知らんのか？」

「知らん。悪いか？」

仁齋は泉進のバカにしたような顔が癪に障つたらしく、ムスツとした。泉進はお茶を一口啜り、

「辰野神社という神社だ。その系図によれば、発祥は一万年前」

「一万年前？ それは随分と大風呂敷だな」

仁齋は呆れ顔で言った。泉進は真顔になり、

「つまり、縄文の昔から続いているという事だ」

「！」

仁齋と藍は思わず身を乗り出した。泉進は2人の顔を見比べて、

「その神社の宮司は、縄文時代から封じられている神気を集めていると思われる。何をするつもりなのかはわからんがな」

「しかし、日本の神気は先日の建内宿禰の計略で、そのほとんどが吉野に集められたはず。それほどの力が残っているとは思えんぞ」

仁齋が反論した。すると泉進は、

「いや。あの時集められたのは、関東と中部と近畿以西の神気のみ。北海道と東北は手つかずなのだ。豊国一神教、すなわちお前の妹の小山舞が仕出かした騒動の時も、北海道と東北の神気は使われてはいない」

「そうなのか？ だとすると、話は違つて来るな」

藍はギクツとして泉進を見た。泉進は、

「辰野神社は東北各県に各一社ずつある程度の規模の小さい神社だが、悪い事に東京本部が千代田区のビル街にあるのだ。そこが本当の本拠地らしい」

「東京に？ しかし何も感じんな。それほどの連中なのか？」

仁齋は尚も訝しそうに言った。泉進は再び仁齋を見て、

「東京の本部には、力のある者はいない。単なる受け皿だ。しかし、

千代田区にあるというのがまずい。あそこは吉野とは違った意味で神気の集まる場所。連中が東京に本部を置いたのはちょうど建内宿禰が根の堅州国に封じられた直後なのだ」

「待っていたという事か？」

「恐らくな」

藍は泉進の言葉に身震いした。

( 建内宿禰が封じられるのを待っていた意味はわからないけど、何か嫌な予感がする・・・ )

「その宮司の名前は？」

仁齋が尋ねた。泉進は仁齋を見て、

「辰野真人。見かけは温厚そのものの爺さんだが、神官とは思えん程の金銭欲の強い男だ」

「なるほど。なかなか与し難い人間らしいな」

仁齋は腕組みをして呟いた。泉進はさらに、

「真人は頭脳担当で、息子の実人みひとが体力担当だ。自分の意に沿わない連中を神罰と称して鉄拳制裁している」

「ほオ。何とも形容し難い親子だな」

と仁齋が言つと泉進はニヤリとして、

「鉄拳制裁はどこかの誰かさんも昔得意だったと聞いたぞ」

「な、何の事だ？」

その話には藍も思わず吹き出したが、仁齋に睨まれて慌てて顔を背けた。藍は女の子だったから殴られた事はないが、小学生の時よく同級生の男子が仁齋に頭をコツンと叩かれていたのは知っている。「別の誰かさんは男共5人を相手に大立ち回りしたとも聞いている」泉進のその言葉に今度は藍が仁齋を睨んだ。仁齋はスツと顔を横に向けてトボケた。藍が中学生の時、同級生の女子が男子に虐められているのを助けた時の事を仁齋が大袈裟に電話で泉進に話していたのを思い出したのだ。

「話が十分脱線してしまつたようだな」

泉進は真顔に戻つた。

「奴らの狙いは恐らく太古の神気。それを求めて縄文の神気を盗んでいるのだと思う」

「えっ？」

藍はギョツとした。何故か泉進は藍を見ていたからだ。仁斎が、

「藍と何か関わりがあるのか？」

「大ありだ。奴が目をつけたのは杉野森学園だからだ」

藍は仁斎と顔を見合わせた。

「どうしてそんな事が分かったのだ？」

仁斎が尋ねた。泉進は仁斎に目を向けて、

「辰野親子がある暴力団と接触しているのだ。その暴力団を飼っていると言われているのが超大物政治家の工藤清蔵」

「……」

政治の話には疎い仁斎は藍を見た。藍は、

「聞いた事があります。影の首相とも呼ばれている、与党の大長老ですよ？ その人が何か？」

「まだ正確にはわかっておらんのだが、工藤が杉野森学園の土地を欲しがっているらしいのだ」

「杉野森学園の土地を？ あそこを手に入れてどうしようっていうんですか？」

藍には工藤代議士の意図が読めない。泉進は、

「そこまではわからん。安本さんから何か聞いていないのか？」

「安本からは何も聞いていない。あいつ、自分で何とかしようとしているのか……」

仁斎は腕組みをして呟いた。藍が心配顔で、

「理事長、お身体の具合が良くないのよ。そんな事が本当に起ころうとしているのなら、力になってあげないと、お祖父ちゃん」

「そうだな。明日にでも会いに行くか」

「私も明日聞いてみる」

藍がそう言うと、泉進が、

「いや、俺が明日会いに行く。2人は動かんでくれ」

「どついう事だ？」

仁斎は泉進を睨んだ。泉進は仁斎を見て、

「辰野神教の祭神は竜。いくら姫巫女流でも太刀打ち出来ん。儂が調べてみるから、暫く待て」

「竜？ 祭神が竜なのか？」

仁斎はギクツとした。藍は仁斎の様子がおかしいのに気づき、

「どつしたの、お祖父ちゃん？」

「杉野森学園を辰野神教が狙っている理由が分かった」

仁斎の言葉に泉進はニヤリとした。

「ほオ、お前も少しは出来るようになったな、仁斎」

「バカにするな、泉進。儂は杉野森学園の建設の時、地鎮祭を執り行ったのだぞ。あの土地の事は良く知っておる」

仁斎はキツとして泉進に言い返した。

「どついう事なのよ、お祖父ちゃん？」

藍が重ねて尋ねた。仁斎は藍を見て、

「あの土地の下には竜が眠っているのだ」

「じゃあ、辰野神教の目的は、その竜なの？」

「恐らくな」

藍は身震いした。

東北地方にある辰野神社。その規模は全国にある小野神社に比べれば小さい。そして、宗教法人として活動を始めたのはまだそれほど前ではなく、氏子もいず、一切の宗教活動をしていない。謎が多い神社である。

「只今戻りました」

広い板の間で長身で細身の若い男が言った。辰野神教の次期宮司である辰野実人である。グレーのスーツに総髪、切れ長の眼、高い鼻は、実人の鋭さを象徴していた。彼の向かいに正座している老人が実人を見上げた。

「どつであつた？」

老人は白装束で、髪は長く白一色、長い顎髭を生やしている。顔は穏やかだが眼は鋭く実人を見据えている。彼の名は辰野真人<sup>たつのまひと</sup>。実人の父親であり、辰野神社の現宮司だ。

「器<sup>うつわ</sup>は見つかりました。これでわが教団の悲願が叶います」

実人は真人の前に正座し、無表情のまま答えた。真人はニヤリとして、

「あの男は見つかったか？」

「小野雅ですか？ 罫にかけて結界に閉じ込めてあります」

小野雅。かつて藍の許婚だった男だ。真人は再びニヤリとし、

「これで一方の力は封じた。闇が閉じれば、光が溢れる」

と呟いた。

## 第一章 剣志郎の憂鬱

翌日になった。

泉進は山伏姿からごく普通のスーツ姿になり、杉野森学園の理事長室のソファに腰を下ろしていた。

「久しぶりですね、遠野さん。お元氣そうで何よりです」  
長身で白髪混じりの頭の紳士然とした男が言い、泉進の向かいに座った。彼が杉野森学園の理事長である安本浩一である。

先代が戦前築いた莫大な資産で様々な事業を興し、日本の発展に寄与して来た。そして今は学業に人生を賭けて挑んでいる人物である。温厚そのものの人柄は、誰からも慕われている。仁斎とは旧知で、泉進とも長い付き合いである。但し、泉進はあまり出羽から出ないので、顔を合わせるのは何十年か振りではある。

「あまり楽しい話をしに来たのではないので、用件をすませたらすぐに帰るよ」

「ほう。どんなお話ですか？」

安本は微笑んだままで尋ねた。泉進は真顔で、

「ヤクザがうるついでおるだろう？」

「……」

安本はまさかそのような話題に触れられると思っていなかったのか、ギクツとした。

「さすがですね。どこでその情報を？」

安本はそれでも落ち着いた様子で泉進に尋ね返した。泉進は真顔のまま、

「僕は僕で別の連中を追っていた。偶然だよ。僕の追っていた連中があんたのところにはチョツカイを出しているヤクザと接触したんだ」  
「何者なんです、泉進さんが追っている連中は？」

「竜を悪用しようとしている輩だ。何としても阻止しなければなら

ん

「竜？」

その言葉に安本の顔色が変わった。

「仁斎も言っておったが、この土地には凄まじい竜の気が渦巻いていたそうだな？ 仁斎が姫巫女流の結界でそれを封じ、地下深く押さえ込んだと言っていた」

「はい。その竜の気に我が学園は守られているそう。それを狙う連中とは、穏やかではありませんね」

「確かに以前来た時には感じられなかった竜の気が学園に渦巻いている。気を感じない者には何でもないが、少しでも竜の気がわかる者は影響される。生徒達や職員達にそのような事は起こってはいないかね？」

泉進は真剣そのものの顔で訊いた。安本は戸惑った顔で、

「それは何とも……。私自身、竜の気を感じられませんから。それに学園で何か起こってれば、すぐに私の耳に入るはずですから、今のところは何もないと思われます」

「そうか」

泉進はホツとしたように呟いた。そして、

「ヤクザはどんな事をして来ている？」

「今のところは具体的な事は何もして来ていません。只、学園周辺を歩き回っているらしく、女子生徒の何人かが職員に相談して来たようです。何をされた訳ではないので、警察にも言えず、正直困っているのです」

「なるほど。合法的に嫌がらせをしているのか。それにしても、そういった飼い主は一体何が目的なのか」

「工藤代議士、ですか？」

安本は探るように尋ねた。泉進は頷き、

「あの物欲の塊が、まさかこの学園を乗っ取るうなどとは考えてはいまい。何かあるはず。暴力団まで使って何を企んでいるのか？」

「ええ」

安本も腕組みして考え込んだ。

「いずれにしても、しばらくは静観だな。仁斎には儂から話をしておく」

「はい」

安本は真顔のまま頷いた。泉進は彼の顔を覗き込み、

「疲れているようだ。無理はせん事だ。この学園、まだまだあんなしでは立ち行かなくなる」

「ありがとうございます」

泉進は立ち上がった。

「取り敢えず、竜の気を中心に行ってみる。現時点では、何も異常は感じられんが、気になる事もあるのでな」

「はい。場所はお分かりですか？」

安本も立ち上がった。しかし泉進はそれを手で制して、

「承知しておる。仁斎から聞いた。あんたはついて来なくていい。

それに、今のあんたはこれ以上竜の気に近づかん方がいいぞ」

「はア……」

泉進は安本の見送りも拒否して、理事長室を出て行った。

「竜か……。一人気になる男がいるが……」

安本は自分の机に戻り、ある男の事を考えた。

泉進は、学園の裏手、木陰ができている場所に来ていた。方位的には、杉野森学園の鬼門に当たる。祠があり、注連縄で囲まれている。

「なるほど。これは想像を絶する竜の気だ。しかし、何故？」

泉進が知る限りでは、これほどの竜の気は、東北地方にも北海道にもない。

「だからか。だから、辰野神教はここを……」

泉進は決意を新たにした。

「ならば尚更手出しはさせぬ。この気を悪用されれば、首都壊滅は免れぬ」

安本が気になったという男である竜神剣志郎は、その日も憂鬱だった。

「ここ何日か、特に身体が怠だるいな。何だろう？」

彼は俯いたまま歩いていたので、前から来た人物に気づかず、ぶつかりそうになった。

「考え事をしながら歩くな、若造」

そう言って剣志郎を叱責したのは、泉進だった。

「あ、す、すみません」

剣志郎はビツクリして頭を下げた。しかし泉進はそれには応じず、サツサと歩いて行ってしまった。

「何だ、あの老人は？」

剣志郎は泉進の事を全く知らなかったが、泉進は剣志郎の事を知っていた。と言ってより、藍から聞かされていたので、思い当たったのだ。

「今の男が、竜神剣志郎か……。まるで何も気を感じないが……。苗字は伊達か？」

泉進は歩いて行く剣志郎の後ろ姿を眺め、目を細めた。

「しかし、やはり微かに竜の気を感じるか。しかし、まさかな……」

泉進は苦笑いをして、

「もしそうなら、ずっと以前に目覚めているはず。今その兆候がないのは、彼奴あやつにその才がない何よりの証拠だ」

と呟くと、クルリと踵かかとを返し、歩き出した。

藍は、正面玄関から出て来た泉進に気づき、廊下の窓を開けて、

「泉進様！」

と声をかけた。泉進は藍のほうを見て微笑み、

「おう、藍ちゃん。授業は終わったのか？」

「ええ。もうお帰りですか？」

「うむ。ここは確かに良い気が集まっておるな。この学園は、この気がある限り、栄え続ける」

泉進は周囲を見渡しながら言った。藍は頷いて、  
「私も気を感じます。ただ、乱れているような……」

「そうだな。外を見回ってから、帰るとするよ」

「はい。お気をつけて」

藍が泉進の背中にそう言うと、彼は振り返らずに、

「僕よりも安本の方を気遣ってやってくれ。それと、あのボンクラもな」

「は？ ボンクラ、ですか？」

藍はキョトンとした。泉進はニヤリとして振り返り、

「藍ちゃんを好いておるのに、他の女子おなこに現うつを抜かすボンクラじゃ  
「よ」

「まあ！」

泉進が剣志郎の事に言及したので、藍はビククリした。

「剣志郎に会ったのですか？」

「すれ違っただけだ。それよりな」

泉進は再び藍に近づき、

「彼奴あやつは竜神という姓を名乗っておるが、ほとんど竜の気を背負って  
「おらん。どういう事だ？」

「竜の気を？ 剣志郎の家の事は聞いた事がないので、わかりませ  
んが」

藍は少し考えてから答えた。泉進は再び歩き出し、

「まあいい。だが藍ちゃん、あの男、気にかけていてくれ。危うい  
事になるかも知れぬ」

「え？」

藍はその言葉にギクツとした。

(気にかけたいけど、今はあいつに近づくのは気が引けちゃう……)  
藍の思いは複雑だった。

その頃、社務所で仁斎はある女性と向かい合っていた。

「竜神さん、ですか？」

意外な人物の来訪に、仁斎は驚きを隠せなかった。しかも、その女性は只ならぬ気を纏まとっているのだ。正体が余計に気になった。

「はい。剣志郎の母の、竜神美月りゅうじんみづきです」

「……」

アップにした髪と和服姿が似合う、整った顔立ちの女性だ。面差しはどこかあの男と似ているな。仁斎は予想してはいたが、まさかと思う気持ちもあったので、言葉が出なかった。

「さすがに名立たる神社の宮司様ですね。私の身に纏わりついてい  
るものがおわかりのようで」

美月はそう言って微笑んだ。

「もしや、杉野森学園の一件と関係がありますかな？」

仁斎は探るような目で彼女を見た。美月は表情を変えずに、

「学園で何が起こっているのかは私は存じ上げません。今日は全く個人的なお願いで参りました」

「そうですね。どのような？」

仁斎は探るのをやめて、居ずまいを正した。美月は真顔になって、  
「宮司様のお孫さん、藍さんとおっしゃったかしら？」

「はい、そうです。藍が何か？」

仁斎はますます訳がわからなくなった。美月は続けた。

「藍さんに、今後一切剣志郎に近づかないようお願いに参りました」

仁斎は、それはこっちのセリフだ、と思ったが、

「それはどういう意味ですか？ 藍が何か貴女の息子さんにご迷惑でも？」

少しばかり嫌味がきつかったかなと思うが、藍に対して近づくなとはどういう見だ？ 仁斎はすっかり只のジイ様になって、ムツとしていた。

「そうではありません。藍さんのために申しております。剣志郎に

これ以上関わると、藍さんが大変な事になりますので」

「具体的にどうなる？」

仁斎は、多分教えるつもりはないと思ったが、取り敢えず尋ねてみた。

「それは申せません。竜神家の内々の事ですので」

「竜の気が絡んでおるのですか？」

仁斎はカマをかけるつもりで言った。しかし、美月は仁斎の誘導には乗らず、

「大変申し訳ありませんが、お答えできません。お許し下さい」

と、深々と頭を下げた。仁斎は不満だったが、

「わかりました。藍には私から言っておきます。しかしですな、職場が同じですから、全く近づかないという訳には……」

「剣志郎には、杉野森学園を辞めさせます」

美月は冗談を言っているようには見えない。仁斎は、「竜」が繋ぐこの一連の出来事に戦慄した。

「では、私はこれで」

美月はサツと立ち上がった。仁斎が続こうとすると、

「お見送りは結構です。失礼致します」

美月はそう言って社務所を出て行ってしまった。

「竜……」

仁斎は思わずそう呟いた。

泉進は、学園の塀の周りを歩いていた。

「む？」

彼は塀のあちこちに土を掘り返したような形跡がある事に気づいた。

「只、掘り返しただけか。どういう意図があるのだ？」

「おい、ジイさん、そんなとこで何してるんだ？」

その声に振り向くと、ヤクザと思しき屈強そうな男が三人立っていた。

「何じゃ、お前は？ 儂に用か？」

泉進はまるで怯んだ様子もなく、ヤクザ達を見上げた。

「妙な事嗅ぎ回ってるらしいな。東京湾に浮かびたくなかったら、家に帰りな」

「嫌だと言ったら？」

泉進は全身から気を漲みなぎらせて尋ねた。ヤクザ達にはそれがわからないらしく、年寄りの強がりと映ったらしい。笑い出したのだ。

「このジジイ、自分が正義の味方か何かだと思ってるぜ」

「イカれたジジイか」

泉進はその間に気を溜め込んでいた。

「思っているのではないぞ。儂はまさしく正義の味方じゃ」

泉進のその言葉と同時に、三人のヤクザに気が放出された。

「グヘエ！」

ヤクザ達は、まるで強烈なパンチでも見舞われたかのように飛ばされ、塀と道路の間の側溝に落ちてずぶ濡れになった。

「ちよっかい出す相手を良く見定めよ、愚か者め」

泉進の言葉に、ヤクザ達は何も言い返せない。泉進は立ち去りながら、

「ついでにお前らの飼い主に言っておけ。ここはお前のような欲の皮が突つ張つた輩が手を出していい場所ではないとな」

と言い放った。

「そつか。わかった」

辰野真人たつのまひとは、それだけ言うと、携帯を切った。

「出羽の出しゃばり行者が、しゃしゃり出て来たか」

彼はソファに腰を下ろしながら呟いた。

「宮司、大丈夫なのだろうな？ ヤクザ三人をまとめて側溝に落としてしまうようなジイさんを相手にして」

そう尋ね、ソファの向かいに座ったのは、政権与党の長老である工藤清蔵だ。スキンヘッドで眼光が鋭いため、暴力団の組長にも見

えるが、間違いなく衆議院議員である。

「そちらは実人みひとがおります故。ご安心下さい、先生」

真人はフツと笑った。

「杉野森学園は我が神が降臨した土地です。何としても、手に入れなければなりません」

「そして、地下に眠る時価数百億円とも言われている埋蔵金。それも是非手に入れねばならん」

工藤の目がギラつく。所詮は金が目当ての男だ。杉野森学園を乗っ取れたら、校舎は全部壊し、埋蔵金を回収した後は、高級マンションを建てる計画である。

「埋蔵金は、官僚だけが抱えている訳ではないのだな、宮司」

工藤は下品な笑みを浮かべ、真人を見た。

「はい」

真人は顔は微笑んでいたが、

(お前も用がすんだら、我が神の生け贄になってもらう)と考えていた。

その頃、剣志郎は、思わぬ訪問者に戸惑っていた。

「母さん、何しに来たんだ？」

応接室で剣志郎は大声で言った。しかし、母美月は冷静に、

「今日は理事長先生に会いに来たのよ。貴方は関係ないわ」

「理事長に？」

実は剣志郎は、麻弥と付き合っている事を美月には伝えていない本気ではないから、そこまでする必要はないと考えているのだ。しかし、理事長に会われると、理事長からその話を聞くかも知れない。剣志郎は焦っていた。

「どうしたの、顔色が悪いけど？」

美月が尋ねる。剣志郎は苦笑いして、

「そ、そりゃそうだよ。何の前触れもなく、母さんが来るからさ」

「私に来られると、何かまずい事でもあるのかしら？」

「……」

剣志郎は冷や汗をかいて黙り込んだ。そこへ原田事務長が顔を出した。

「お母上、理事長室へどうぞ」

「はい」

剣志郎はドキツとした。そして更に驚愕の事実を告げられた。

「貴方も同席しなさい、剣志郎」

「えっ？」

そんな事を言われるとは思っていなかった剣志郎は、理由もわからないまま、美月と共に理事長室に向かった。

藍はちょうど家に帰り着いたところだった。いつもは出迎えたりしない仁斎が、鳥居の前に立っていた。泉進も一緒だ。只ならぬ気配を感じ、藍はヘルメットを抱えて二人に近づいた。

「どうしたの、お祖父ちゃん？」

「まア、中で話そうか」

仁斎は先に立って歩き始めた。泉進が、

「さつきからあの調子だ。何も教えてくれん」

「そうですね」

仁斎がムスツとしている時は、ろくな事がない。昔から藍はそれを思い知って来た。

「何なのよ、全く」

藍はそう呟き、仁斎を追いかけた。

「お久しぶりです、美月さん。お元気そうで何よりです」

安本は微笑んで出迎えてくれた。美月も微笑み、

「お久しぶりです。理事長先生はお変わりありませんか？」

「いやあ、最近めつきり老け込みました」

「そうですね」

他愛もない話をしながら、三人はソファに腰を下ろした。

「さて、今日は何ですか？ 剣志郎君も同席とは、何かおめでたい話ですか？」

安本はすでに原田から麻弥との事を聞かされているので、その件だと思っていた。剣志郎は、もうダメだという顔をして下を向いた。「いえ、そのようなお話で参りましたのなら、私も嬉しいのですが、今日は大変申し訳ないお話をしに参りました」

「は？」

安本はキョトンとした。剣志郎もそうだ。

(何言い出すんだ、母さん?)

彼は母親の横顔を凝視してしまった。美月はゆっくりと口を開き、「剣志郎にこの学園を辞めさせるために参りました」

と言い出した。安本も剣志郎も、驚き過ぎて何も言えないうでいた。

## 第二章 光の神

剣志郎は、母美月の発言に啞然としていたが、

「な、何言ってるんだよ、母さん！ どういうつもりなんだ？」

「そうです。私も驚いています。剣志郎君は非常に優秀な先生ですよ。それを……」

安本がそう言うと、美月は息子の発言はまるで無視して、

「大変申し訳ないとは思っております。それに、授業の事もあるでしょうから、それほど急に辞めさせるつもりはございません」

「母さん！」

剣志郎は自分が無視されたのを感じ、美月に詰め寄った。しかし美月は、

「貴方は黙っていなさい」

とピシヤリと撥ねつけ、安本に視線を戻すと、

「全く個人的な理由で申し訳ありませんが、剣志郎をこれ以上この学園に勤めさせる事ができなくなってしまったのです」

「理由を教えてください。あまりに仰っている事が一方的過ぎます」

安本はさすがに怒りを覚えたようだ。確かに美月の言い分はあまりに勝手だ。

「それはお教えできません。只一つだけ申し上げれば、剣志郎の命に関わる事なのです」

美月の発言に、安本だけではなく、剣志郎も息を呑んだ。

「い、命に関わるって、それ、どういう意味だよ？」

剣志郎が苛ついて言った。しかし美月は全くそれを無視して、

「これ以上はお話できません。何とぞ、ご了承下さい、理事長先生」

と言うと、深々と頭を下げた。

「いや、しかし……。他の理事達に何と説明すれば……」

安本は困り果てた顔で言った。すると美月は、

「問題を起こしたとでも、学園の金を使い込んだとでも仰って下さって結構です」

「そ、そんな……」

安本は呆れかけたが、そこまでして理由を話したくない美月の事を考えた。

「母さん、酷過ぎるぞ。理由を教えてください」

「貴方には後で話します」

「……」

母親の凄みのある顔に、剣志郎は気圧される形で黙り込んだ。

一方藍は仁斎から剣志郎の母親である美月の来訪の事を告げられていた。

「剣志郎のお母さんが？」

社務所の中に藍の大声が響いた。

「大きな声を出すな、はしたない。僕はそんなに耳は悪くない」

仁斎は憤然として言った。横に腰掛けている泉進は黙ったままだ。

「何をしにいらしたの？」

藍はドキドキして尋ねた。仁斎は一瞬言い淀んだが、

「お前を息子に近づけないでくれと頼まれた」

「ええっ？」

全く思ってもいない事を言われ、藍は仰天した。

「ど、どういう事よ？ それじゃまるで私が、剣志郎に何かしたみたいなのじゃないの！」

「だから、大声を出すなど言っている！」

「そう言う仁斎の声も十分うるさい。」

「だって、その……」

藍は顔を赤らめて言い訳をしようとする。

「私は別に剣志郎に近づくって、そんな事した事ないし……」

「寧ろ逆だな」

仁斎は同意するように言った。

「そ、それも違うわよ。あいつはさ、その、煮え切らない男だから、そんな事もなかったわ」

「何だ、お前、その口ぶりだと、待っていたのか、あの男が言い寄って来るのを？」

仁斎は藍を真顔で見つめた。藍はムツとして、

「違うわよ。言い寄って欲しかった訳じゃないわ。只、付き合い長いし、あいつが私の事をどう思っているのかくらい、直接聞かなくてもわかるし、耳に入るわよ」

「そうだな」

仁斎はニツとした。そして、

「美月さんは、お前が大変な目に遭うと言っていた」

「私が？」

藍には訳が分からない。今まで大変な目に遭って来たのは、剣志郎の方だ。その事を責められて、近づかないで欲しいと言われるのなら、合点が行く。しかし、その逆では意味がわからない。

「そう言う事か」

突然今まで黙っていた泉進が言った。

「何だ、泉進？ どういう事だ？」

仁斎が泉進を睨んだ。泉進は藍を見て、

「今日、彼奴あやつに会ったと言ったろう？」

「あ、はい」

藍も泉進を見た。泉進は声を低くして、

「彼奴の竜の気、最近になって少しだけ発して来たような様子だった。もし、儂の見立て違いでなければ、学園の竜の気に当てられて、彼奴の竜の気が目覚め始めているのかも知れぬ」

「でも、もしそうだとしても、私に近づくなと言うのは……」

「そこよ」

泉進は藍を指差して言った。

「何だ？」

仁斎が促す。泉進は二人を見て、

「藍ちゃんが姫巫女流を極めたせいで、あの男に影響が出ているのではないか？」

「えっ？」

藍はキョトンとした。仁斎はポンと手を打って、

「そうか。なるほどな」

「どういう事ですか？」

藍には意味が分からない。

「つまり、彼奴が藍ちゃんを諦めて、別の女に心を向けたために、藍ちゃんと彼奴の気の流れに不都合が生じたという事だ」

泉進の言葉に少しだけ引っかけた藍は、

「それって、私が剣志郎と武光先生の関係に嫉妬してるって事です  
か？」

「いや、そこまでは言っていないよ、藍ちゃん。藍ちゃんの感情は関係ないのだ」

泉進は苦笑いをして言った。仁斎が、

「要するに、あいつがお前の方を向いていた時は、お前の気とあいつの気は何事もなかった。しかし、あいつが他の女に気を向けてしまったために、お前の気とうまく噛み合わなくなったという事だ」  
「どう聞いても、私が嫉妬してるからのように聞こえるんだけど？」

藍はまだムツとしたままだ。

「だから、それはお前の考え過ぎだ。気の流れの善し悪しは、その気を放つ者の感情には影響されない。方向だけが問題になるのだ」

仁斎の更なる説明にも藍は納得がいかない。

「今までは、あいつのお前に対する気の方が上回っていた。しかし、お前が戦いの中で自分自身の気を高めたせいで、あいつの気がお前の気に返されるようになった。そのせいであいつは自分の気持ちがお前に届いていないと勘違いし、他の女に気を向けた、という事だ」  
「そんな事言われても……」

藍は困った顔をして泉進を見た。

「確かに藍ちゃんは何も悪くない。しかし、どうやら、あの竜神と

いう男の家、只の家ではないようだ。辰野神教の動きと関係があるのかも知れぬ」

「美月さんは、学園で何が起こっているのか知らないと言っていたがな」

「そんなはずはない。恐らく、知っているはず。そして何か関わりがあるはずだ」

泉進は確信に満ちた目で言い切った。

千代田区の一角にあるビル。その中に辰野神教の東京本部がある。

「小野が動いたか」

本部中央にあるご神体の間。板の間で、部屋の西側に巨大な竜の絵が飾られている。

「はい」

その部屋の真ん中で、正座をして向かい合って座っている辰野真人たつのまと実人みひと。

「器となるべき者ではあるが、あの男は姫巫女流と関わりがある。どうするつもりだ？」

真人が尋ねた。実人は眉一つ動かさずに、

「母親に脅しをかけました。逆らうと、息子の命はないと」

「なるほど。搦め手から攻めるか」

真人はニヤリとした。そして、

「私の方は、もう少し時間がかかる。工藤に動いてもらう」

「学園を乗っ取らせるのですか？」

実人は関心がない顔だ。

「そうだ。一応奴の顔を立てる。生贄になってもらうのだからな」

「我らが神にも、お好みがございましょう」

実人は冗談を言ったのだろうか？ 真人は苦笑いをして、

「確かに、あそこまで腹黒い男は、不味かろうな。しかし、奴の黒さを我が神はご所望なのだ」

「光の神は、闇を食らうと？」

実人が初めて反応した。彼は眉をひそめていた。

「そうだ。だからこそ、小野雅も生かしておくのだ。奴は小野に対する牽制だけでなく、生贄としても最高級品だからな」

「はい」

実人はまた無表情に戻り、頷いた。

剣志郎は、車中全く何も話してくれない母親に苛立っていたので、アパートに着くなり口を開いた。

「どういふ事が説明してくれ、母さん」

「座りなさい。話が長くなりますから」

美月は厳しい表情で言った。剣志郎は渋々キッチンの椅子に腰を下ろした。

「貴方には、竜神家の事を何も話した事がなかったわね」

美月は向かいに腰掛けながら切り出した。剣志郎はキョトンとして、

「何の事？」

「竜神家は、代々続く竜神の神社の宮司の家系でした」

美月の話は、本当に剣志郎には驚愕の事実だった。

「亡くなったお祖父様の代で、それは途絶えしました。男児が生まれなかったためです」

「……」

剣志郎はハツとした。

（確か、父さんは養子……。まるで藍の家と変わらないのか、ウチは？）

「終わったと思っていたのは、私達だけだったのです」

「どういふ意味だ？」

剣志郎は、母親の謎めいた物言いに眉をひそめた。

「竜神家の力を悪用しようとしている者達がいいます」

「え？」

剣志郎はギクツとした。美月は声を低くして、

「先日、その者達が家に来ました」

「何だつて!?! どうして俺に教えてくれなかったんだ?」

剣志郎が叫ぶと、美月は、

「貴方を狙っている連中の事を、貴方に言えるはずがないでしょう」  
「俺を狙っている?」

剣志郎にはますます訳がわからない。

「竜の気を背負っているのは、私だけと思っていました。それが、  
貴方にも発現している事がわかったのです」

「竜の気?」

剣志郎は呆気に取られた。美月は続けた。

「最近、理由もないのに身体が怠くなったりしていない?」

「え?」

母親のその指摘に剣志郎はビクツとした。

「あの杉野森学園には、強大な竜が眠っているのです。そのために、  
貴方はその気に当てられて、疲労を感じたのです」

「そんなバカな……。疲れを感じたのは、つい最近だよ。そんな事  
なら、もっと前にそうなっていたはずだよ!」

美月の言葉を信じ切れない剣志郎は、そう反論した。

「それは、藍さんのせいよ」

「藍のせい?」

ますます訳がわからない。

「何で藍のせいなんだよ!?!」

剣志郎はムツとして尋ねた。美月はフツと笑って、

「貴方、やっぱり彼女の事が好きなのね?」

「……」

剣志郎は、実の母親にそう指摘されて、真っ赤になって黙り込ん  
だ。

「その事は構いません。でも、彼女とは付き合ってはならないので  
す」

「な、何でだよ？」

剣志郎はようやく口を開いた。すると美月は、  
「藍さんの気が、貴方の中で眠っている竜の気呼び起こしかけて  
います。その気は、目覚めさせてはならないのです」

「はあ？」

剣志郎にはついていけないような話の流れだ。

「ですから、今日、学園に伺う前に、藍さんのお祖父様とお話を  
しました」

「ま、まさか……？」

今の話の流れで行くと、母親が仁斎に何を言ったのか、鈍い剣志  
郎にも想像がつく。

「藍さんを剣志郎に近づけないでほしいとお願いしました」

「……」

剣志郎は項垂れてしまった。

「そんなに好きだったのね、藍さんが」

美月はクスツと笑った。剣志郎はキツとして母親を睨み、

「ああ、そうだよ！ 悪いかよ!？」

と怒鳴り散らした。美月は真顔に戻り、

「お黙りなさい。何もわからない貴方が、偉そうな事を！」

「……」

美月の迫力に、剣志郎は続けようとした言葉を飲み込んだ。

「理事長先生に申し上げたように、貴方の命に関わる事なのよ。藍  
さんとの事は、諦めて」

美月は少しだけ悲しそうな顔をした。

「わ、わかったよ」

剣志郎は椅子から立ち上がった。

「悪いけど、帰ってくれないか、母さん」

剣志郎の混乱を感じた美月は、そばに着いていたかったが、

「わかりました。何かあったらすぐに連絡して。母さんは貴方が心  
配なの」

「ああ」

剣志郎にも母親の気持ちは理解できていた。しかし、自分に何の連絡もなく動いた母親が、どうしても許せなかった。すぐには回復できないほどのダメージなのだ。

「またね」

美月は寂しそうな顔で出て行った。

（藍はもう知っているんだらうか？）

そう思って、携帯に手を伸ばすが、先日の一件以来、藍とは気まぐずい関係になっっている事を改めて思い出し、やめた。

「藍……」

諦めたつもりが、全然諦められていない。そんな自分をつくづく弱い男だと思ふ剣志郎だった。

東北地方のいずこかにある山の奥の祠（ほこり）。その中に小野雅は監禁されていた。

「どういう仕組みだ？ 何故、根（ね）の堅州国（かたすくに）に行けない？」

雅は強力な結界に閉じ込められているのだ。思えば、本当に油断していた。

彼は、氣の流れが不自然なところを探索していたのだが、それが畏だと気づいたのは、結界に閉じ込められた後だった。

（あの辰野実人とかいう男、只者ではない。それに、奴の後ろに感じたあの強力な靈氣は……）

「まさか、小野宗家を襲うつもりか？」

自分を畏に掛けるだけで、命を取らない理由はそれしかない。雅は齒軋（はなはな）りした。

「何と問の抜けた事を……」

彼は自分の愚かさを罵った。

「縄文の遺跡が、靈的破壊をされているのを感じ、探った結果がこれか」

雅はもう一度、根（ね）の堅州国（かたすくに）に入ろうとした。

「む？」

しかし、闇の向こうへ抜けると、元の結界の中だった。

「謎が解けない……」

雅は目を瞑り、考え込んだ。

（椿が張った結界の中でさえ、根の堅州国ねかたすくにを通れば入れた。それなのに、何故この結界から出られないのだ？）

どうしても合点がいかなかった。

「む？」

何者かが祠に近づいて来た。辰野実人だった。

「闇の力では、光に決して勝てぬ。何をしても無駄と知れ、小野雅」  
相変わらずの無表情で、実人は言った。雅はフツと笑い、

「誰かと同じ事を言うな。そんな事は承知している。闇が光に勝つ事はあつてはならない」

「ほう。思っていたより、素直だな」

実人はまるで表情が変わらない。雅は実人に背を向けて、  
「だが、歪んだ光は、いつか消える事になる。せいぜい気をつける事だ」

「我が神は光の最高神。愚弄する事は許さぬ」

実人は拍手を打った。一度だけだ。

「何だ？」

雅は妙に思い、振り返った。実人の身体から、竜のような姿の光が伸びて来た。

「罰を与える。存分に味わえ！」

その光は、まさしく光の速さで雅を拘束し、締め上げた。

「ぐあああ！」

雅はその凄まじい力に、全身が砕かれてしまうような痛みを感じた。

「うっ……」

光は雅から離れ、実人に戻った。雅はそのまま地面に倒れ伏した。  
「お前に残された道は、我が神の生贄となる事のみだ」

実人はそう言うと背を向け、祠を出て行った。

「くそ……」

雅は地面に這いつくばりながら、実人の後ろ姿を睨んだ。

泉進は一度出羽に戻る事になった。

「もう一度、縄文の遺跡を調べてみる。何かわかったら連絡する」

「携帯電話くらい持て、泉進。連絡がすぐできんで困る」

仁斎がそう言うと、泉進はニヤリとして、

「考えておくよ」

と言い、立ち去った。

「剣志郎に連絡した方がいいかしら？」

藍は憂鬱そうな顔で仁斎に尋ねた。仁斎は社務所に入りながら、

「今はまだあの母親がそばにいるだろう。明日、学園で訊いてみる」

「え、ええ……」

電話ならまだしも、直接尋ねるのは気が引けたが、剣志郎の事が心配だったので、そんな事は言っていられないと自分に言い聞かせる藍だった。

### 第三章 それぞれの動き

翌日。

藍は学園に着いたが、駐車場からなかなか歩き出せない。剣志郎と顔を合わせたら、多分逃げ出してしまう自分がいるのがわかっているからだ。

「おはようございます、小野先生」

そんな事をしていたので、もつと顔を合わせたくない武光麻弥が現れてしまった。

「お、おはようございます、武光先生」

藍は顔を引きつらせて応じた。すると麻弥は神妙そうな顔をして、「少しお時間大丈夫ですか？」

「は？」

麻弥は駐車場の端まで藍を誘導してから、

「竜神先生はまだ誰にも話さないで欲しいとおっしゃっているのですが、私は黙っているのは嫌なので、小野先生だけにでもお話したいと思います」

「えっ？」

何を言い出そうとしているのか、察しがつくだけに嫌な汗が出る。

「私と竜神先生は、結婚を前提にお付き合いしています」

「……」

知ってはいた。しかし、こうして実際に麻弥の口から宣言されると、自分が思っていた以上に動揺している事に気づく。

「私、どうしても、小野先生にだけはお話したかったです」

麻弥は真っ直ぐな目で藍を見た。藍は目を逸らしそうになるのを堪え、彼女を見た。

「そうですか。どうして？」

何とか恍くらけてみた。だが、あまりにも白々しいとも思った。

「竜神先生は、未だに小野先生の事が好きだからです」

麻弥は澀みない口調で言い切った。

「そんな事ないですよ。それは武光先生の誤解です」

それでも言ってみる藍。麻弥はフツと勝ち誇ったように微笑み、  
「そうかも知れませんが。でも今は間違いなく、竜神先生は私の恋人  
ですから」

「そうですか……」

別に剣志郎が誰と付き合おうと関係ないと思っていた。今でも私は雅の事を忘れられないのだ。そう信じていた。確かに雅を忘れられるはずはない。しかし、知り合って十年近く経つ剣志郎に、何の思いもないかと言えば、それも嘘だと思い知らされた。

「では」

麻弥はそのまま駐車場を去った。藍はしばらく呆然としていたが、剣志郎の車が駐車場に入って来たのに気づき、ハツとした。

（逃げちゃダメ。きちんと話をしないと……）

今日は自分の感情で動いてしまっただけはいけない。藍はもう一度自分自身に言い聞かせる。

「あつ……」

藍がまだ駐車場にいる事に気づき、剣志郎もギクツとした。彼は、藍のバイクが学園の門をくぐるのを見て、手前で待機していたのだ。もういないだろうと判断し、車を進めたのだが、まだ藍はいた。

（まさか、今逃げるように去るって訳にはいかないよな。多分、藍もお祖父さんから聞いて、ここにいるんだろうからな）

剣志郎は意を決して車を降り、藍の方へと歩き出した。

「あ……」

藍も、剣志郎が車を降りて、自分の方に歩いて来るのに気づき、ビクツとした。

（訊かなくちゃ。何があったのか……）

藍も剣志郎に向かって歩き出した。

「！」

その時だ。藍は剣志郎の周囲に光の玉が動き回るのを見た。

「何？」

それが竜の気だと気づくのに然程時間さほどはかからなかった。彼女は立ち止まった。

「そこで止まって！」

「どうしてだ？」

藍の意外な言葉に、剣志郎は驚いて尋ねた。

「貴方も聞いているんでしょ、何が起こっているのか？」

「あ、ああ……」

剣志郎は、夜になって美月から携帯に連絡を受け、気を鎮める呼吸法を指導された。確かにそれによって大分身体は楽になったのだが、今こうして学園の敷地に入り、その上藍に近づくと、それでも鎮められないほど身体の中の何かが活性化するのが感じられた。

「私に近づいたから、竜の気が騒ぎ出したわ。そこでいいから、話を聞かせて」

藍はゆっくりと言葉を選ぶように話した。剣志郎は頷いて、

「お前もお祖父さんから聞いているんだらう？」

「ええ。でも近づかせないでくれという話しか知らないわ。後は私達の推測でしかない」

「そうか……」

剣志郎はそれでも言い淀んでしまう自分が情けなかったが、

「ウチは、竜神を祀る神社の家系だったらしいんだ」

「竜神を？」

「ああ。俺のジイさんの代で、その血筋は途絶えたと思われていた。俺の親父は養子で、神社の宮司は血縁の男しか継げなかったからだ」

藍はゆっくりと頷いた。女が宮司の神社もあるが、それはやはり少数である。歴史が長いところほど、女性に継がせないという風習が残るところは多い。

「それで、俺の家は、神社を遠縁の者に譲り渡し、宮司の職も渡した。だから、親父はウチが神社だった事は知らないし、俺も知らなかった」

「でも血が受け継いでいたのね」

藍が言った。剣志郎は頷き、

「そうだ。俺のお袋もすっかりと竜の気を受け継ぎ、俺もそれを引き継いでいた。その事がわかったのは、俺がこの学園に勤め始めてからだったそうだ」

「でも、貴方がここに来たのは、三年前よね。どうして今になって……？」

藍はドキドキしながら尋ねる。仁斎と泉進の説が正しければ、答えはわかっている。

「藍が、強くなったかららしいよ」

剣志郎は俯いて答えた。言い辛そうだ。

「そう。私のせいなのね」

藍のその言葉に、剣志郎は弾かれたように顔を上げた。

「ち、違うよ。お前のせいって事じゃない。仕方なかったんだ。お前は知らなかったのだし……」

「でも、私のせいには変わりないんでしょ？」

藍は少し意地悪かも知れないと思いつつも、そう言った。

「いや、でも……」

剣志郎は言葉に詰まる。違うと言い切れない。事実はそのなかから。

「それから、おかしな連中が、学園を狙っているらしい。そのため、俺の身体の中にある竜の気が必要だと、お袋を脅かしたそうなんだ」

「何ですって？」

藍はさすがに驚いてしまった。

「だから、お袋は、一刻も早くこの学園を辞めて、違う職に就けて言っんだ」

「……」

藍には衝撃的な話だった。

( 剣志郎が、学園を辞める？ )

杉野森学園高等部の同級生で、大学では一年後輩であったが、腐れ縁なのか、就職先まで一緒になった。そんな剣志郎が自分のそばからいなくなるかも知れない。藍は動揺がはつきりとわかつていた。「どうしてよ?」

「えっ?」

藍の声が酷く非難の籠ったトーンだったので、剣志郎はハツとした。

「当てつけ? 私に対する当てつけなの? 何の怨みがあるのよ!」

自分でも不思議なくらい、藍は暴言を吐いていた。全身から、形容し難い怒りが込み上げて来て、怒鳴らずにはいられなかったのだ。「いや、そんなつもりは……。俺はまだ、お袋の言う事を承知した訳じゃないし……」

「決まってもいない事をどうして私に話すのよ? 当てつけだからじゃないの!」

「おい、藍……」

剣志郎は藍を宥めようとして一歩踏み出した。その時だった。

「うおっ!」

剣志郎の身体から、竜の気が噴出した。それは気を全く感じない剣志郎にすら感じられるほどの勢いだった。突然身体が怠たるくなった。

「何?」

藍も、その竜の気の勢いに驚き、身構えた。噴出した竜の気は、巨大化し、竜そのものの姿に変化へんげした。

「竜?」

藍はその気を見上げて呟いた。剣志郎にはその気は見えない。

「何だ、何が起こっているんだ?」

「離れて、剣志郎!」

「え?」

何が何だかわからなくなっている剣志郎に苛立った藍が、

「だったら、私が離れるわ!」

と叫ぶと、背を向けて走った。

「ああ……」

藍が剣志郎から離れると、あれだけ勢いがあつた竜の気がたちまち萎み、剣志郎の身体の中に戻ってしまった。

「あれ？」

剣志郎は、さっきまでの倦怠感が嘘のようになくなったので、完全にキョトンとしていた。

「ごめん」

藍は突然そう言った。

「えっ？ 何で謝るんだよ？」

剣志郎には藍の謝罪の意味がわからない。

「やっぱり私のせいね。でも貴方がこの学園を去る必要はないわ。私が辞めればすむ事だから」

「いや、お前のせいだけじゃないんだよ。この学園の土地に、竜の気があるんだ。そのせいで、俺の中の竜の気が暴走するかも知れない。だから、俺が辞めるしかないんだよ」

剣志郎はあくまでも藍の事を庇おうとしていた。しかし、それが藍にはいつそう辛い事なのだ。

「だったら、何かいい解決方法がないか、探しましょうよ。貴方のお母さんを脅かした連中、私には見当がついているわ。そいつらの事は私達に任せて。絶対にこの学園にも、貴方にも、指一本触れさせないから」

藍のその言葉に、剣志郎は感激していた。

「藍……」

剣志郎は藍と通じ合えたかと初めて思えた。しかし、藍は違う事を考えていた。

（この土地の竜の気は、泉進様と知恵を出し合えば、どうにかできる。でも、私と剣志郎の相性は、どうする事もできない）

藍がごく普通の家庭に育ったのであれば、自分の力を何かしらの方法で消失させるという選択肢もあったらう。しかし、小野宗家の

後継者である藍には、そんな選択肢はないのだ。

「会議が始まるわ。私は後から行くから、貴方は先に行って、剣志郎」

「ああ」

剣志郎は嬉しそうに返事をすると、駐車場を後にした。

「ごめんね」

藍は彼の後ろ姿を見ながら、そう呟いた。

「小野宗家の娘、竜の気に影響するほどの存在です。小野雅よりも、あの娘の方が厄介です」

辰野<sup>たつの</sup>実人は、千代田区にある辰野神教の本部のご神体の間で、父である真人<sup>まひと</sup>と話していた。

「そうだな。しかし実人、いくら我が神が最強と言えども、あの娘は建内宿禰すら倒したのだ。簡単にはいかぬぞ」

「だからこそその器の存在なのですよ、父上」

実人は無表情のまま言った。真人はニヤリとし、

「そろそろ、実行犯に動いてもらうという事か？」

「はい。竜神<sup>りゅうじん</sup>美月は、我らの脅しに完全に屈服しております。もはや手駒も同然。あの息子も、母親の命が危ないと思えば、迂闊な事はできないでしょう。母一人、子一人ですから」

「なるほどな」

真人は狡猾な笑みを浮かべ、携帯を開いた。

「大野さんか？ 私だ。頼みがあるのだがね」

相手が何が言っている。

「もちろん、これは工藤先生の件とも関係ある。ある男をウチに連れて来て欲しいのだ。ああ、手荒な真似をしても構わんよ」

真人はニヤニヤしながら話す。

「だが、命だけは取らんようにな。大事な『器様』<sup>けいざう</sup>なのだからな」

「器様」とはどうやら剣志郎の事のようにだ。しかし、どういう事なのだろうか？

「行者のジイ様が、また出羽に戻ったらしいぞ。何かを探るつもりらしい」

真人は携帯をしまいながら実人に言った。

「あんなジジイ、放っておいても、何も支障はありませんでしょう。むしろ、この東京から離れていてくれる方が良いかと」

実人は少しだけ頭を下げて言った。真人はフツと笑って、

「確かに。もう、東北には用はない。器も、ご神体も、東京にあるのだからな」と言った。

工藤清蔵は、国会に向かう車の中で、広域暴力団である大野組の組長、大野寛おのひろしからの連絡を受けていた。

「そうか、そうか。遂に見つかつたのか。わかつた。うまくやれよ。なアに、警察や検察なら、私に任せておけ。何とでもなる」

工藤は悪意に満ちた顔で言い、携帯を秘書に渡した。

（私も戦後間もない頃から、随分と裏社会を見て来ている。辰野め、この工藤清蔵を陥れようとしているのだろうが、そうはいかないぞ。大野はお前の友人かも知れないが、私の手下なのだからな）

工藤は真人の企みなどお見通しだった。しかし、どちらかより狸なのかは、終わってみるまでわからない。

「化かし合いで負けた事はない。喧嘩を売る相手を間違えた事をじっくり後悔してもらおうか」

工藤はそう呟き、ニヤリとした。

「ねえねえ、見た？」

祐子が嬉しそうに尋ねる。由加はウンザリ顔で、

「何よ？」

「小野先生と、竜神先生が、凄い言い合いをしていたのよ」

「どこで？」

「駐車場で」

「あんたも暇ねえ」

由加は呆れて歩を速めた。只今彼女達は、体育館に移動中だ。  
「私も見たわよ」

と波子が会話に加わった。

「言い合いつていうより、竜神先生がやり込められてたって感じに見えたけどなア」

「そうかなア。こここのところ、鳴りを潜めていた痴話喧嘩に見えたんだけど……」

祐子は首を傾げた。由加は、

「どつちも正解なんじゃない。今までだって、大概、竜神先生が負けてたんだからさ」

藍はすっかり「カカア天下」にされているようだ。

「藍先生はさ、何だかんだ言っても、竜神先生の事が好きなのよ。だから、最近、すつごく機嫌悪かったじゃない？ それってさ……」

由加が言いかけた時、波子が何故か「やめる」のサインを出す。  
「えっ？」

ハツとして振り返ると、麻弥が近づいて来ていた。

「わわっ、ヤバ……」

由加は慌てて口を噤んだ。

「先生、今日はまた一段とお綺麗ですね」

波子が白々しいお世辞を言う。麻弥も心得たもので、  
「あら、そんな事ないわよ、江上さん」

とニツコリ笑って返し、去って行った。

「危ない……。聞かれてないわよね？」

由加は胸を撫で下ろして言った。祐子が、  
「多分ね」

「でも、悪口は聞こえ易いって言うからねえ」  
波子が脅かす。

「やめてよ、私、英語ヤバいんだからア！」  
不安がる由加だった。

仁斎は境内を掃除していた。辺りは静まり返っており、ほし筥が枯れ葉をかき集める音だけが聞こえている。

「む？」

彼は視界の端に人影を捉え、手を止めた。

「どなたかな？」

鳥居の前に立つ、若い女性。藍と同年代くらいか、と仁斎は思った。

「失礼致します。私は、辰野薫と申します」

女性は一礼をして名乗った。

「辰野？ まさか……」

仁斎は眉をひそめた。するとその女性は、

「はい。私の父は真人、兄は実人です。小野家の方にお話があった参りました」

と答えた。

## 第四章 辰野薫

仁斎はあまりに意外な訪問者に、しばらくの間、何も言えないでいたほどだった。

「すみませんな、ぼんやりしてしまつて。こちらへどうぞ」

彼は辰野薫たつのかあるを社務所に招き入れた。

「失礼致します」

薫からは全く何も感じられないのであるが、仁斎は一応警戒していた。辰野真人たつのまひとが送り込んだスパイかも知れないからだ。

「私をお疑いなのですよね？」

薫は勧められた椅子に腰をかけながら切り出した。仁斎はビクツとしたが、

「あ、いや、そんな事はありませんよ。只、苗字がですね……」

「仕方ないですよね。今はどんなに小さな子供が現れても、苗字が辰野だったら、間違いなく疑いの目で見られますよね」

薫は自嘲気味に微笑んで言った。仁斎はお茶を用意しながら、

「申し訳ない。私はそんなに疑っている顔でしたか？」

「いえ、そういう意味ではありません。私もそれなりに、父と兄の事は伝え聞いています。ですから、こちらの神社を父と兄が敵視している事も存じております」

「敵視、てすか？」

不穏な言葉に仁斎の眉間に皺が寄つた。薫は仁斎を真っ直ぐに見て、

「はい。小野神社がなくなれば、辰野神社が栄えると申しております  
した」

「なるほど」

商売敵という事か？ 仁斎は少しだけホツとした。

「それから、これが一番お伝えしたかった事なのですが」

薫はそう言いながら、一枚の写真を出した。

「これは……」

仁斎は写真に写っている人物を見て驚いた。小野雅おのみやびだったのだ。

「この写真は？」

「実家の近くの森で撮られたものです。お知り合いの方ですよね？」

「はい。以前ここにおりました。この写真、いつ撮られたものですか？」

仁斎は写真を手に取りながら尋ねた。薫は首を横に振って、

「いつ撮られたものなのかはわかりませんが、それほど前ではないと思います」

「そうですね。それで、これが一番伝えたかった事ですか？」

仁斎はまだ何かあると思い、促した。すると薫は、

「いいえ。そうではありません。一番お伝えしたかった事は、その人がいる場所なんです」

「いる場所？」

確かに藍なら知りたがるだろうが、と仁斎は思った。

「その人は、兄が作った祠ひらの中の結界むすびに閉じ込められています」

「結界に？」

途端に話が謎めいて来た。

「何故雅は貴方のお兄さんに閉じ込められたのですか？」

「それはわかりません。でも、その人はそこから出られないでいます。ですから、小野家の方にお知らせした方がいいと思います、ここに来たのです」

「出られないのですか……」

仁斎は不思議に思っていた。黄泉路古神道の使い手は、根ねの堅州かたす国くにを通れば、どこにでも行けるはずなのだ。それなのに結界から出られないというのは、妙な話だ。

「兄はその人に、『闇は光には決して勝てない』と申ししていました」  
「闇は光には決して勝てない……」

確かにその通りだ。しかし、結界に閉じ込めたものに何故そのような事を言うのだろうか？ もしや実人みひとは、雅を試しているのか？

その言葉に何か意味があるのか？

「一つお尋ねして宜しいかな？」

仁斎はお茶を出しながら言った。

「はい」

薫は相変わらず真っ直ぐに仁斎を見ている。

「辰野神社のご神体は何ですか？」

「竜です」

「そうですね。それで、貴方の父上と兄上が、杉野森学園の土地を手に入れようとしている事はご存知ですか？」

仁斎の質問に、薫はキョトンとした。

「すぎのもり学園ですか？ いえ、初めて知りました」

「実は私の孫娘が勤めている学校なのですよ」

薫は考え込む仕草をしてから、

「どちらにあるのですか？」

「世田谷です。ここからそれほど離れていません」

仁斎がそう言うと、薫は何かを思い出したようだ。

「東京で何かを手に入れようとしているのは聞いた事があります。

最近父は東京にいる事が多くて。兄は時々戻って来るのですが」

「そうですね。こちらにはお一人で？」

薫はニコツとして、

「ええ。私、大学が東京なので、父と兄には東京の友人に会うと嘘を吐いて参りました」

「大丈夫ですか、小野神社こひのに来たりして？」

仁斎は、薫の身を案じて尋ねた。すると薫は微笑んで、

「大丈夫です。私はノーマークですから。何をしていようと、咎められる事はありません」

「ほお」

仁斎は意外な返答に思わず大きく頷いた。

「何よりも、父も兄も、自分達の力を過信しているのです。ですから、万に一つも計画が頓挫するなどは思っていないません」

「そうですか」

仁斎は、薫の楽天ぶりに、逆の意味で怖さを感じた。

（竜を祭神とする神社は多いが、杉野森学園の竜の気は別物だ。あれを手に入れようとしている連中が、このお嬢さんが思うような単なる自信過剰とは思えぬ。やはり……？）

「あの、何か？」

仁斎が黙り込んでいたので、薫が声をかけた。

「ああ、申し訳ない。考え事をしてました」

仁斎は、薫に力は感じなかったが、何か油断ができないものを感じていた。

（この娘、スパイとは思えんが、何か妙だ。現れ方が、唐突過ぎる……）

藍はなるべく剣志郎に近づかないように行動した。剣志郎も、藍と鉢合わせしないように気をつけながら、校内を移動した。その二人の不自然な動きが、由加達お喋り三人組にはとても奇異に写ったようだ。

「あの二人、隠れんぼでもしているつもりかしら？」

呆れ顔で由加が言った。祐子は肩を竦めて、

「さアね。会いたいんだか、会いたくないんだか、わからないわね」

「もしかしてさ、武光先生に気を遣っているんじゃないの？」

波子が眼鏡をクイツと上げて言った。

「誰が私に気を遣っているの？」

「わわっ！」

いきなり後ろから、本人が登場したので、三人は仰天して飛び上がった。

「あっははは、何の事ですか、武光先生？」

いきなり慌ける由加。無理がある。波子が慌ててフォローする。

「先輩に会うと気を遣うよねえって、話していたんですよ」

「そんな話してた？ 私の名前が聞こえたんだけど？」

麻弥は疑いの眼差しを三人に向けた。

「もう、先生、自意識過剰ですよ。いくら竜神先生と付き合っているのが秘密だとしても」

祐子がまた口を滑らせた。思わず顔を見合わせ、ヤバいという顔を  
をする由加と波子。

「えっ？」

思わず赤面する麻弥。知られていると思っていなかったので、彼女  
はかなり動揺した。

「わわわーっ、何でもないですウ！」

由加と波子は「お喋り魔神」の祐子を抱きかかえるようにして逃  
げて行った。

仁斎は薫を見送った後、あちこちに連絡を取り、その返事を待つ  
てから、泉進に連絡を取った。彼も仁斎に言われ、出羽に入る前に  
携帯を購入したのだ。

「泉進か」

仁斎が言った。すると泉進は、

「当たり前だ。これは僕の携帯だからな。僕が出るのが当然だろう」  
「しかし、携帯電話だからこそ、誰が出てても不思議ではない」

仁斎の言う事ももつともな話である。

「つまらんことを言うな。そんな事を話すために、わざわざ高い電  
話料を払うのか？」

「そうではない。辰野薫と名乗る女が来たのだ」

「辰野薫？ 真人の娘だな」

仁斎は電話相手に頷いて、

「雅が辰野に囚われていると教えに来た」

「そうか。妙だな」

泉進も仁斎と同じ考えのようだ。

「そうだ。何でも、真人と実人は、彼女の事を全く警戒しておらん  
との事だ。それも妙だ」

「そうだな。実人はともかく、真人は猜疑心の塊のような男だ。自分の娘でさえ、疑っているかも知れぬ」

仁斎はまた頷く。

「仮に彼女が全く真人と真人に疑われていないとしても、何故わざわざ小野神社に来たのかわからん。雅が囚われている事を知らせたのなら、電話でも手紙でも、最近流行のメールでも良かるう」

「確かにな」

泉進は苦笑いをして、

「メールは相手のアドレスがわからんと送れんぞ。調べる方法もないしな」

「藍がウチのホームページを立ち上げておる。インターネットで検索すれば、『小野神社』で見つけられるはずだ」

「ほお」

泉進は素直に感心した。

「直接来る必要はないはず。何か他に理由がある」

「かも知れんな。で、儂にどうしろと言うのだ？」

「雅の居場所を探って欲しい。お前なら、雅の気を辿れよう」

仁斎は真剣な表情で告げた。泉進は、

「雅が囚われの身というのが想像できんな。どういう事だ？」

「奴は結界に閉じ込められているのだと彼女は言っていた」

泉進は眉をひそめた。

「黄泉路古神道の使い手ならば、どのような結界でも出る事ができるはず」

「儂もそう思った。しかしな、確かに雅の気が封じられておるのだ。東北各県の小野分家に探らせたのだが、雅の気は辿り切れなかった。岩手の分家が、一番多く雅の気を辿ったようだ。しかし、それも途切れている」

仁斎の話に、泉進は俄然興味を惹かれた。

「あいつは縄文遺跡の気の消失を知り、あちこち現れていた。儂も奴の行動を気にかけていたのだが、お前のところに行っている間に

大きく動いたようだな」

「そういう事だ。頼めるか？」

仁斎は改めて泉進に言った。

「頼まれるまでもない。そもそも辰野神教との関わりは儂の方が先だし、深い。雅の事は任せろ。藍ちゃんのためにも探し出す」

「藍は関係ない」

仁斎は藍絡みだとまだ雅を許せないらしい。泉進はニヤリとして、儂はあの同僚の男よりは雅の方が藍ちゃんと似合いの夫婦だと思つとるぞ」

「余計な事は考えんでいい。とにかく、そちらは任せたぞ」

「わかった」

仁斎は電話を切り、玄関に向かった。杉野森学園の事も気にかかったのだ。

その藍は、授業を終え、剣志郎がいないのを確認して、社会科教員室に向かっていた。

「小野先生」

原田事務長が声をかけた。

「はい」

藍は声に応じて振り返った。原田の隣には、薫が立っていた。彼女は藍と目が合うと、会釈した。藍も会釈して、

「あの、そちらの方は？」

「辰野薫さんだ。小野先生に会いに来られたそうだ」

「辰野、薫さん？」

藍はその苗字を聞いて緊張した。

(あの辰野神社と関係があるのかしら?)

「応接室が空いているから、そちらでどうぞ」

原田はニヤリとして立ち去った。

「ありがとうございます」

藍は原田に礼を言い、

「こちらです」

と薫を誘導し、応接室に入った。

「あの……」

向かい合って座りながら、藍は切り出した。

「はい、私は辰野神社の者です」

薫は笑顔で答えた。藍はその笑顔が余計に怖くなった。

「どういったご用件で？」

藍は探るような目で尋ねた。薫はそれに気づいたようだったが、

「実は先程、小野先生のお宅に伺いまして、お祖父様とお話しました」

「えっ？ 祖父とですか？」

藍はビクツとした。

「はい。それで、ある方の事をお話したのです」

「ある方？ 誰ですか？」

薫は仁齋に見せた写真を出し、テーブルの上に置いた。

「この方です」

藍は驚いた。まさか雅の写真を見せられるとは思っていなかったからだ。

「お知り合いの方ですよね？」

「はい……」

藍は写真を見たままで答えた。

「確か、小野雅さんでしたよね」

「はい」

藍はそこでようやく薫を見た。

「彼はどこにいるのですか？」

「岩手県の辰野神社の裏手にある森の奥の祠の中です」

「祠の中？ どうしてそんなところに？」

藍は詰め寄るように尋ねた。薫は藍の迫力に驚きながらも、

「私の兄である実人が、雅さんを結界の中に閉じ込めたんです。それで、雅さんはそこから出られないでいます」

「結果？」

雅に結界など無駄以外の何ものでもない事は、藍はよく知っていた。

「お祖父様も同じ顔をされました。結界から出られないのはおかしいとも言われました」

「ええ。その通りです。その人は、特殊な力があつて、どんな結界でも閉じ込める事はできないのです」

藍の説明に薫は頷き、

「私の兄も、その事を知っていたようです。その上で、雅さんを閉じ込めたのです。何かそこに秘密があるようなのですが」

藍は薫の言動に疑問があつた。こんな事を自分に話して、この人は大丈夫なのだろうか。

「何故そんな事を私に話して下さるのですか？」

藍の疑問に薫は苦笑いをした。

「そうですね。私の行動、不自然ですよね」

「あ、いえ、そんな事を言っている訳では……」

藍は慌てて否定したが、薫は、

「私は、父と兄に目を覚まして欲しいのです」

「えっ？」

薫の顔は真剣そのものだった。

「二人は、途方もない事をしようとしているのです。私は、まだ後戻りできるうちに、二人を止めたいのです」

「……」

藍は薫の話素直に聞く事にした。

「続けて下さい」

藍のその言葉に、薫はニッコリして、

「ありがとうございます」と  
と頭を下げた。

「二人は、神社の隠し扉の中から、千年以上に記された書物を見つけました。それには、ご神体の場所が記されていたらしいのです」

「ご神体？」

藍は鸚鵡返しに言った。薫は頷いて、

「ご神体は武蔵の国にあると記されていたそうです。それが、恐らく、ここ」

「！」

藍はギョツとした。ご神体とは、祖父仁斎が封じた竜の気の事だろうか？

「その書物には、ご神体を手に入れた者は、永遠の栄華を手に入れられると書かれていたそうです」

「永遠の栄華、ですか……」

そんなものは存在しない。藍は確信している。そのようなものに惑わされ、自滅して行った者を見て来ている。小野源斎、小山隆慶、小山舞。そして、小野椿……。

「ご神体は一体何なのですか？」

藍が尋ねた。すると薫は首を横に振り、

「それは記されていないかったです。私も、父と兄が話しているのを聞いただけで、その書物を見た訳ではないのです」

「そうですか……。それは今どこに？」

「多分、辰野神教の東京本部。千代田区のビルにあると思います」

「千代田区に？」

「はい」

藍は何かの畏かとも思った。しかし、いくら探ってみても、薫からは何も出て来ない。彼女が術者でない事は明白だ。

「私は、何としても二人を止めたいのです。そんなご神体なんて、私達に必要なではないのです。貧しくてもいいから、昔のように親子仲良く暮らしたいんです。嫌なんです、今の父と兄が！」

薫の感情が一気に爆発したようだった。一筋の涙が彼女の頬を伝った。

（この人、本当にそれだけを願っているのね。疑ったりして悪かったわ……）

「わかりました。ありがとうございます。私も、貴女に協力します。いろいろ教えて下さい」

「はい。よろしく願います」

薫は涙を拭いながら言った。

「本当に構わんのか、実人？」

辰野神教の東京本部のご神体の間で、真人と実人は差し向かいで正座していた。

「はい。薫が何をしようとも、然したる影響はございません」

「そうだといいがな。あいつは現に、私達に嘘を吐いて、東京に来ている。友達と会うとか話して、実際は小野神社に行ったらしいぞ」

真人は警戒心が強い。しかし、実人はそんな事には動じていなかった。

「先程も申し上げたように、薫一人が何をしようとも、我々が計画に微塵の差し障りもございませんよ、父上」

真人は、息子の凄まじいまでの冷静さに、父親ながら恐ろしくなっていた。

「むしろ、薫の行動は、我らの望むところですよ。あいつが動けば動くほど、小野の者達は、我らの真意を見誤りましょう」

実人は無表情のまま言った。

## 第五章 剣志郎拉致

修験者である遠野泉進とのおのせんしんは、仁齋の依頼で雅を探すために岩手県に赴いていた。

「確かに彼奴あやつの独特の気が感じられぬ。本当に結界に閉じ込められているのか？」

泉進は、辰野神社の近くに来ている。

「真人まひとも実人みひとも、東京か。ここにはいないようだ」

その方がやり易い、と泉進は考え、周囲を探り始めた。

藍は、薫を見送ってから、一瞬躊躇ったが、剣志郎の携帯に連絡した。

「はい」

緊張した剣志郎の声が聞こえた。

「ごめん。大丈夫？」

「ああ。どうした？」

藍は深呼吸をしてから、

「貴方はここを辞める必要はないわ。私が辞めるから」

「えっ？」

剣志郎が何か言おうとしたのを藍は遮るように、

「この学園に渦巻いている竜の気は、私達が何とかする。でも、私と貴方の気の相性はどうしようもない。だから、私がここを辞める。貴方は残って」

「いや、でも……」

「残って！」

藍は強い口調で言った。

「今度は、長い戦いになりそうなのよ。仕事を続けながらでは無理。

それに、理事長のお身体の事もあるし」

「えっ？ 理事長？ どういう事だ？」

剣志郎は何も知らないのか？ 藍は携帯を持ち直して、  
「理事長は心労が続いていて、あまり無理が効かないの。そこへ貴方が辞める話したら、もっとお身体に障るでしょう？」  
「それは、お前が辞めるっていう話でも同じだろう？」  
「私は、ここに勤め始める時に、こんな事が起こるかも知れないので、理事長には予めお話ししてあるのよ」  
「……………」

藍は嘘を吐いている。剣志郎はそう思った。しかし、その嘘が自分の事を思つての嘘だとわかるので、とても辛い。

「貴方だけの問題ではないの。学園の存続に関わるような話なのよ。だから、私は……………」

「辞めるなんて言うなよ」

剣志郎の声が後ろで聞こえた。いつの間にか、彼は藍の近くに來ていた。

「ダメ！」

尚も近づこうとする剣志郎を藍が止めた。竜の気が、再び蠢うごき始めている。朝より激しい。

「くっ……………」

剣志郎は目眩めまいがして、足下がふらついた。藍は、助けをあげられない自分が齒痒い。

「藍！」

剣志郎が呼び止めるのも虚しく、藍は走り去った。

「……………」

剣志郎は意を決して、母美月に連絡した。

「母さん？ 今夜会いたいんだけど。ああ。辞めるよ。俺が辞めないと、収まりがつかないんだろ？」

半ば自棄になっている剣志郎の口調を感じ取り、美月は、

「何があつたの？」  
と尋ねた。

「今夜話す。じゃあ」

剣志郎は一方的に話を終了し、携帯を切ってしまった。

辰野神教の東京本部の執務室で、実人が配下の男から報告を受けていた。

「そうか」

薫が藍と話をした事まで、全て筒抜けになっている。

「バカな女だ。そんな事しても、全くの無意味だという事がわからんのか」

実人は窓に近づき、外を眺めた。

「姫巫女流が如何に強かろうと、それはあくまで人神じんじんでの話。我らが神は、光の神で最強なのだからな」

実人は無表情のまま呟いた。

辰野薫は、杉野森学園を出ると、今度は辰野神教の東京本部に向かっていた。

「どうしても止める。私は本気よ、お父様、お兄様……」

タクシーの中で、薫は決意を新たにしたら。

一方雅は、何をしても出られない事を知り、地面に正座して目を瞑っていた。

（一体何が起きている？ 外の気配もまるで探れない。一切を遮断されている。会話はできるのに、結界の外の気がまるで感じられないのは何故だ？）

ふと目を開き、地面の小石を拾い、結界の外へ投げてみた。

「むっ？」

小石は何の障害もなく、結界の外に転がり出た。

「物理的には遮断されていないのか？ では力づくではどうだ？」

雅は立ち上がり、結界の外へと手を差し出してみた。

「！」

手は出せる。足の先も出せた。しかし、頭は出せない。

「気か？」

そう思い、手に気を集中してみる。すると手は出せなくなった。

「しかし、それがわかったところで、どうしようもないな。気を足先に集中させれば、その他は外に出られようが、足先だけ出られない事になる」

仕組みはわかって来たが、出る事ができないのに変わりはない。た。

「この理屈だけでは、どうしても根ねの堅州国かたすくにに入れないのか、説明できん」

彼はまた地面に正座し、目を瞑った。

「一から考え直しか」

藍は理事長室を訪れていた。

「そうですね……」

安本はソファに向かい合って座りながら、藍の辞意を伝えられた。「いつかはこんな日が来るとは思っていましたが、これほど早く訪れてしまうとは思いませんでしたよ、藍さん」

安本は残念そうな顔で言った。藍も頭を下げて、

「本当に申し訳ありません。でも、私のせいで、剣志、いえ、竜神先生を辞めさせる訳にはいきません」

「それはそうなのですがね……。他に方法はないのですか？ 仁斎さんとも相談してみても下さい」

「はい……」

仁斎は、元々ここで藍が働く事をそれほど賛成していなかったから、辞めると言えば、止めはしないし、安本の願いも聞き入れないだろう。むしろ、藍がここを辞める事で、より強くなれると考えるかも知れないのだ。

「とにかく、もう一度考えて下さい。私は貴女にも、竜神先生にも、辞めて欲しくないのですから」

「はい……」

藍は安本の辛そうな顔を見ているうちに、自分の決心が揺らぎそうになったので、退室した。

剣志郎は学園を出ていた。しばらく走って信号待ちをしていた時、「あのー、すみません」

と助手席側から男に話しかけられた。剣志郎はウィンドーを開けて、「何でしょう?」

男はニツコリして、

「杉野森学園はどちらですかね?」

「ああ、それならですね……」

その瞬間、男が何かのスプレーを噴射した。

「な、何……?」

剣志郎はたちまち眠ってしまい、ドアロックを開けられ、連れ出された。その間、わずか数十秒で、周囲の人達が異変に気づいた時、すでに剣志郎の車は無人になっていた。

藍は考え事をしながら、駐車場に来た。

「剣志郎……」

剣志郎の車がない事に気づく。それと同時に、彼の気が乱れたのにも気づいた。

「何?」

只ならぬ心配がした。

「何があつたの、剣志郎?」

藍はすぐさまヘルメットを被り、バイクに跨がった。

「何、何なの?」

胸騒ぎがする。しかし、どうして胸騒ぎがするのか、藍にはわからなかった。

安本は居ても立ってもいられず、仁斎に電話をしていた。

「藍さんが今日、学園を辞めたいと言って来ました」

仁斎は安本の言葉に、

「そうかね」

とだけ言った。

「仁斎さん、藍さんを説得して下さい。彼女が辞めてしまうのは、我が学園にとって大きな損失なのです」

「藍から理由は聞いたのかね？」

「はい。竜の気が関係しているとか」

安本がそう答えると、仁斎は、

「ならば、僕には止められんよ。あいつは誰に似たのか、とんでもなく頑固者なのだ。何もかも解決しない限り、辞めるだろうな」

「そこを何とかして下さいませんか？」

安本は懇願するように言った。

「わかったよ。藍を説得するのは無理だろうから、竜の気の方をできるだけ早く何とかしよう」

「ありがとうございます」

安本はホツとした。すると仁斎は更に、

「本当は、あの竜神剣志郎に学園を辞めてもらうのが一番なのだがな」

「仁斎さん……」

安本は呆気にとられた。すると仁斎は、

「まあ、そっちの方も泉進と何とかしよう。しばらく待ってくれ」

「わかりました」

安本は、仁斎が藍を辞めさせたがっている事を知っていたので、少しだけ不安だった。

藍はしばらく走って、剣志郎の車が路上に止まっているのを見つけた。そのせいで、道路は渋滞していた。

「何であんなところに？」

しかも、どう見ても、停止している場所から考えて、駐車しているようには見えない。その上、周囲に人が集まっており、そのうち

パトカーまで現れたのだ。

「何があつたんですか？」

藍はそばまでバイクを進め、近くにいた女性に尋ねた。

「ああ、あの車に乗っていた男の人が、誰かに連れ去られたらしいんですよ」

「えっ？」

藍はギクツとした。

(まさか……)

藍は携帯を取り出し、泉進に電話した。

「どうした、藍ちゃん？」

泉進はワンコールで出た。

「泉進様、泉進様が追っていた暴力団で、どこにあるんですか？」

「何があつたのだ、藍ちゃん？」

泉進はいきなりそんな事を訊かれたので、驚いて尋ねた。藍は剣志郎が拉致されたらしい事を告げた。

「そうか。とうとう、実力行為に出おつたか、あいつらは」

「それで、そいつら、どこにいるんですか？」

「知ってどうするつもりだ、藍ちゃん？」

「助けに行きます」

藍は即答した。泉進はしばらく考えていたようだったが、

「わかった。取り敢えず、仁斎も連れて行くのだ。連中の居場所は、恐らく辰野神教の東京本部だろう」

「千代田区ですね？」

「そうだ。武道館の近くのはずだ」

「それだけわかれば、十分です」

藍は泉進に礼を言つと、携帯を切り、バイクをスタートさせた。

「剣志郎……」

今は彼の命が最優先。藍は仁斎を連れに行く間も惜しみ、そのまま千代田区へと走った。

「何？」

泉進は、藍が一人で言ったと判断し、仁斎に連絡していた。

「バカめ、何を考えておるのだ、藍は」

「とにかく、相手はヤクザだ。いくら藍ちゃんでも、刃物や銃を持った相手では危険だ。すぐにお前も向かった方がいい」

「そのようだな。また後で連絡する」

仁斎は携帯を袂にしまうと、社務所を出た。

「藍、無茶も大概にしてくれよ」

彼は大通りへと走り、タクシーを拾って千代田区を目指した。

「器しゅうびやま様、こちらに向かっているようです」

「ご神体の間で、実人が報告した。真人はニヤリとし、

「そうか。大野め、手際が良かったな」

「但し、薫もこちらに向かっています」

「薫、か」

真人は苦々しそうに呟いた。

「それから、小野藍も、こちらに向かっているようです」

実人の言葉に真人はフツと笑った。

「器様が手に入れば、姫巫女流など赤子同然。恐るるにたらず」

実人はそんな父親を、無表情な目で見ていた。

その頃、杉野森学園高等部は、剣志郎が誘拐されたいという情報が入り、騒然としていた。

「確かな情報なのですね？」

原田事務長が、警察からの連絡を受けた事務員に確認した。

「間違いありません。竜神先生の所持品は、全て車の中に置かれたままだったそうですから」

「そうか。では、私は親御さんに連絡する。君は理事長に伝えてくれ」

「わかりました」

原田はすぐさま書類を捲り、美月の家の電話番号を調べ、連絡した。

辰野神教の本部があるビルの前に、辰野薫が立っていた。

「ここね」

彼女はビルの中へと足を踏み入れた。すると、玄関ホールに実人が降りて来ていた。

「兄さん」

薫は実人を見て言った。実人は薫を見下ろして、

「何をしに来た？ 土産でも持って来た訳ではあるまい？」

「ええ。話があつて来たの」

薫は真剣な表情で言った。しかし実人は薫に背を向けて、

「今は忙しい。下らん話は後で聞く」

「下らなくなんかないわよ！ 兄さん！」

薫は歩き出した実人の前に回り込んだ。

「お父さんもいるんでしょ？ 話をさせて。お願い」

「ダメだ。帰れ」

「嫌よ！」

薫は尚も実人の行く手を阻もうとした。

「例え血を分けた兄弟でも、あまり邪魔をすると、痛い目に遭わせるぞ」

実人はそれでも無表情な顔で薫を見た。

「遭わせてご覧なさいよ。私は怖くないわ！」

薫のその言葉に、一瞬だけ実人の目がギラツとした。

「お前は可愛い妹だ。傷つけたくはない。帰れ」

「本当にそう思うのなら、話をさせてよ」

薫はそれでも引き下がらなかった。

「五月蠅い！」

遂に実人の平手打ちが、薫を跳ね飛ばした。薫はその力に抗し切れず、床に倒れてしまった。それに構わず、再び歩き出した実人の

携帯が鳴った。

「私だ。そうか。わかった。すぐ行く」

彼は足早に廊下を奥へと歩いて行ってしまった。

「うっうっ……」

薫は、その痛みよりも、全く昔と変わってしまった実人の事が悲しくて、立ち上がる事ができなかった。

「薫さん！」

そこに藍が飛び込んで来た。薫は藍の声に驚き、彼女を見た。

「あ、藍さん……」

「どうしたんですか？」

藍は薫の頬が赤くなっているのに気づいた。

「兄を、兄を止めて下さい。お願いします」

薫は助け起こそうとした藍にすがりついた。

「薫さん……」

藍は薫が実人に叩かれた事を感じ取った。

「お兄さんは？」

「奥に行きました。何かを着いたみたいなんです」

「着いた？」

藍は剣志郎の気を感じた。

「ここにいて下さい」

そう言い残すと、藍は実人を追いかけた。

## 第六章 器様

「こいつが『器様』か？」

辰野実人は、大野組の組員に拉致されて縛り上げられた剣志郎を見て呟いた。

「そうです。そんなご大層な人間には見えませんがね」

組員の一人が笑って答えた。しかし、実人はそれには全く関心を示さず、

「ご神体の間に運んでくれ。父上がお待ちだ」

「はい」

組員達は剣志郎を担ぎ、廊下を歩いて行った。

「待ちなさい！」

そこへ藍が走って近づいて来た。実人はチラリと藍を見て、

「小野の者か。邪魔はさせぬ」

と藍の方に向き直った。

「あれが、辰野実人？」

藍は実人から発せられる強烈な気を感じた。

（何、あれ？）

思わず立ち止まってしまった。

「姫巫女流がどれ程のものか知らないが、我らが神に逆らうは、命知らずだぞ」

実人は無表情のまま言い放った。藍はムツとして、

「それ程の神が、一体何を仕出かそうとしているのよ!？」

彼女は自分から攻撃を仕掛けた事はない。しかし、実人に対して様子を見るような戦い方は危険だと瞬時に悟ったのだ。

「はアツ！」

一足飛びに間合いを詰めての正拳突き。しかし、実人はそれを軽く去なし、藍に裏拳を放って来た。

「くっ！」

藍はバク転してそれをかわし、実人から離れる。

「ほお。身のこなしもさすがだな。少しは楽しめるか？」

実人はスーツの上を脱ぎ、投げた。

「……」

藍の額に汗が伝わる。

（この男、体術も相当なものね。さっきの突きを軽く避けて、反撃までして来た……）

藍の正拳突きを避けたのは、今まで一人もいない。それほどの必殺技だった。

「どうした、もう仕舞しまいか？」

実人が挑発する。それでも彼の表情は能面のようだ。

「まだよ！」

藍は気を溜め始めた。

「何をするつもりか知らんが、どんな事してもお前が私に勝つ事はできない。身の程を知れ」

「何を言っているのよ？ 貴方、自分が神様か何かになったつもりなの？」

藍は負けずに挑発し返した。

（隙を作るとしたら、私が仕掛けるのではなく、あいつに仕掛けさせる方法しかない。でもそんな策に乗って来るかしら？）

「来ないのか？」

「……」

実人の問いかけに、藍は何も反応しない。実人はスーツと構え、身を屈めた。

「来ないのなら、私の方から行くぞ」

「！」

藍はハツとした。実人が動いた。しかし、すぐに姿が見えなくなつた。

「くっ！」

藍は辛うじて実人の突きをかわした。

「甘いな」

「えっ？」

かわしたはずの突きが、グインとうねり、藍の右脇腹に突き刺さった。

「グフツ！」

藍はその衝撃で跳ね飛ばされ、廊下の壁に激突した。

「うつつ……」

そしてそのまま床にずり落ち、倒れた。

「今は急いでいる。相手にするのはここまで。だが、次に私の前に現れた時は、例えお前が女だとしても、その顔を砕き、殺す」

実人はそう言い捨て、スーツを拾うと歩き去ってしまった。

「くっ……」

藍は起き上がろうとしたが、激痛で身体が動かない。

「藍さん！」

薫が追って来た。

「大丈夫ですか？」

薫は蒼ざめた顔で藍を見た。

「生きてますよ……」

藍は微かに微笑んで、薫を見上げた。

「きゅ、救急車を！」

薫が慌てて携帯を取り出す。

「平気です。そこまでして頂かなくても……」

藍は無理をして、ヨロヨロしながら立ち上がった。

「さっ、つかまって下さい」

薫は藍に肩を貸した。

「ありがとう」

藍はここは退くしかないと思い、

「ここを出しましょう。危険です」

「はい……」

さっきは強気だった薫も、藍が打ちのめされたのを見てすっかり

意気消沈してしまつたらしい。素直に応じた。

「藍！」

藍と薫が外に出て来た時、仁斎が到着した。

「お祖父ちゃん……」

藍は情けない声で言った。仁斎は薫に気づき、

「あ、貴女は？」

「どうも……」

薫はとてもバツが悪かった。この状態では、自分が藍をけしか嗾けたように見えてしまう。

「剣志郎が、連れて行かれたわ……」

「そうか。とにかく、態勢を立て直すしかあるまい」

仁斎は、本当は藍を怒鳴りたかったが、酷く打ちのめされている彼女を見て、考えが変わった。

「ごめんなさい、お祖父ちゃん。泉進様に言われたのに、一人で来てしまつて……」

「もう良い。言うな、藍」

仁斎は藍の頭を撫で、まるで子供をあやすかのように言った。

泉進は、雅が閉じ込められている祠の近くに来ていた。しかし、彼には雅の居場所はまだわかっていなかった。

「この辺りに、微かに雅の気が残っている。今まで感じたもので、一番新しい」

泉進は周囲を見渡した。神社の裏手に森がある。

「森の方から感じる。この奥か？」

彼が足を踏み出した時、森の中から五人の男が現れた。

「何だ、お前達は？」

気を巡らせて、相手の考えを読む。どうやら、大野組の組員のようである。

「ジイさん、ウチの若い衆を随分と可愛がってくれたらしいな」

一人の組員が言った。泉進は笑って、

「僕は何もしとらんぞ。連中が勝手に側溝に落ちただけだ」

「うるせえよ、ジジイ！」

もう一人が怒鳴る。皆、殺気立っている。ヤクザは舐められるのが一番頭に来るらしい。

「どうするつもりだ？」

泉進は眼光鋭く組員達を見た。

「決まってる。沈んでもらうのさ、太平洋にね」

五人は泉進を遠巻きに囲んだ。

「その程度の人数では話にならないな。あと一桁頭数を揃えてから来い、若造」

泉進は鼻で笑って言い放った。組員の一人が激怒して、

「大口叩きやがって！ やっちまえ！」

やられ役の「名ゼリフ」である。五人は一斉に泉進に飛びかかった。

「やれやれ……」

先進は仕方なさそうに身構え、たちどころに五人を気で吹っ飛ばした。

「ぐおおお……」

皆、鳩尾みぞおちに強烈な一撃を食らい、地獄の苦しみを味わっていた。

「しばらくそこでそうしておれ。すぐに迎えが来る」

泉進はそう言い残すと、携帯を取り出しながら、森の中に入って行った。

剣志郎の母、竜神美月りゅうじんみづきは、安本からの連絡を受け、杉野森学園に来ていた。

「美月さん」

安本は玄関で彼女を出迎えた。

「理事長先生、この度は大変ご迷惑をおかけ致しまして……」

美月は安本に深々と頭を下げた。

「とんでもないです。こちらこそ、貴女の言葉をキチンと受け止め

ず、こんな事態を招いてしまいました、申し訳ありません」

安本も美月に深々と頭を下げた。美月は、

「剣志郎はどこにいるのでしょうか？」

「先程、小野先生から連絡がありました、彼は千代田区にいるそうです」

「千代田区、ですか……」

美月はその住所の意味がわかっていられるらしく、顔色が悪くなった。

「剣志郎には何もしないと言っていたのに……」

美月の呟きを安本は聞き逃さなかった。

「美月さん、それはどういう意味ですか？」

「美月は安本を見上げて、

「全てお話します」

と言った。

辰野神教本部の中央にある「ご神体の間」には、真人と実人、そして大野組の組長である大野寛、更に衆議院議員工藤清蔵がいた。全員正座し、上座にある祭壇に寝かせられた剣志郎を見ていた。

「これが、そうなのか？」

工藤が尋ねた。真人はニヤリとして、

「はい。これこそが、『器様』です。竜の気を自在に操り、地下に眠る数百億の財宝を掘り起こしてくれる鍵でございます」

「あまり価値がありそうな男には見えねえな」

大野組長が言った。すると実人が、

「では証拠をお見せ致します」

と立ち上がり、剣志郎に近づいた。

「はっ！」

実人は柏手を一回打ち、雅を攻撃した時に出した竜のような形の光を出した。光は剣志郎に近づいた。すると、

「うわっ！」

工藤と大野が腰を抜かさなばかりに驚いた。剣志郎の身体から、

実人の出した光の竜の数の数倍の大きさの竜が現れたのだ。

「どうです？ 器様は身体の中に竜を飼っているのです。そして、あの杉野森学園の地下深く眠っている竜を呼び出してくれる案内役なのです」

真人は得意満面で言った。実人が竜を引っ込めると、剣志郎から出ていた竜も消えた。

「た、確かに。凄いものを見せてもらったよ」

工藤はハンドタオルで汗を拭きながら言った。

藍は社務所ですっかりしよげ返っていた。薫も落ち込んでいる。

「何をそんなに暗くなっているのだ、二人共？」

仁斎は呆れ気味に尋ねた。藍は仁斎を見て、

「術の対決ならまだしも、体術で全く歯が立たないなんて、どうしたらいいのか……」

「そんな事、お前が暴走した結果だろう？ 反省しろ」

「はい……」

そう言われてしまうと、何も言い返せない。仁斎は次に薫を見た。「僕はあんたを信用しとるよ、薫さん。あんたは危険を省みず、あそこに乗り込んだんだ。そんなに落ち込まなくても良いと思うぞ」

「ありがとうございます」

薫は涙ぐみながら言った。

「どうすればいいのかしら？」

藍はもう一度仁斎に尋ねた。仁斎は藍を見て、

「泉進が戻るのを待て。今、雅を探してもらっている」

「えっ？ 雅を？」

藍は意外な話にビックリした。

「そっだ。何故連中は雅を捕えたのか？ そこに何か理由があるはず」

「そっね」

薫が何かを思い出したように、

「確か、兄が『我が神は闇を食らう』と言っていました」

「えっ？ それって、もしかして……？」

藍はギクツとして仁斎を見る。仁斎は眉をひそめて、  
「生け贄にするという事かな？」

と薫に尋ねた。薫は藍の悲しそうな顔を見てから、

「多分……」

藍は驚き過ぎて何も言わない。しかし仁斎は、

「それは恐らく建前だ。生け贄にするなら、畏を岩手に仕掛ける必要はない。杉野森学園近辺か、千代田区のビルのそばの方が効率が  
良いだろう」

「そ、それはそうだけど……」

仁斎の話を聞いても、藍は雅が生け贄にされてしまうのではない  
かという事で頭がパンクしそうだった。

「確かにそうですよね」

薫は安心したように言った。

「それで、僕はある結論に達したのだ。雅を閉じ込めた理由は他に  
あるとな」

「他の理由って？」

藍が尋ねた。しかし仁斎はその事に答えずに、

「連中が動き出したのは、建内宿禰が封じられた直後だ。これも何  
か意味があると思う」

「闇が閉じれば光が溢れる、と父は言っていました。その事と何か  
関係があるのではないのでしょうか？」

薫が口を挟んだ。仁斎は腕組みをして、

「うむ。あるかも知れん。どちらにしても、雅が邪魔だったので、  
閉じ込めたと考えた方が良いと思う」

「……」

藍はまだ何も考えられないらしい。

「それから、藍を簡単に倒してしまう程の実力があるにも関わらず、  
何故ここに来ないのか？」

「あっ！」

藍はようやく回復した。

「お前があのだのビルの中であっさり倒されたのは、連中に有利な気で満ちていたからだ。だから、ここには来ない」

「そ、そうね。そうよね」

「嬉しそうだな、藍？」

仁斎がニヤリと言う。藍は赤面して、

「べ、別にそんな事ないわよ。それより、泉進様から連絡はないの？」

「さっきメールが届いていた。雅の居所がわかりそうだと。そして、また五人不逞の輩を退治したとも書いていた」

「そう」

すっかり携帯を使いこなしているのね、お祖父ちゃんと泉進様は、と藍は感心していた。

「薫さん」

藍は薫を見た。薫は居ずまいを正して、

「はい」

「力を貸して下さい。私は、貴女のお父さんとお兄さんを倒したい訳ではありません。救いたいのです」

「ありがとうございます。私、できる限りお力になります」

「薫さん」

二人はしっかりと両手で握手をした。

安本は理事長室で美月から事の真相を聞き、驚愕していた。

「本当に申し訳ありませんでした」

全てを話し終えてから、美月は床に土下座して詫びた。

「いや、美月さん、そこまでして頂かなくても……」

安本は美月の謝り方は度が過ぎていると思ったのだ。しかし美月は顔を上げて、

「いいえ。あんな連中の言葉を信じて、理事長先生にも、小野さん

にも、私が本当の事を話さなかったためにこんな事になったのです。もしあの子に何かあったら、私はどうしたらいいのか……」

彼女は泣いていた。安本も胸が締めつけられる思いだった。

「剣志郎がこの学園を辞めれば、何もしないと言われたのです。ヤクザ相手に何を信用してしまったのか……。本当にどうかしていません」

「仕方ありませんよ、美月さん。子供の命を脅かす連中と、冷静に話をできる親はいません」

「ありがとうございます、理事長先生」

美月はハンカチで涙を拭いながら言った。

「器様は我々の元に。そして邪魔な連中は封じた。後は杉野森学園を手に入れるだけだな」

工藤が嫌らしい笑みを浮かべて言った。大野組長もニヤリとした。真人はフツと笑って、

「杉野森学園は乗っ取るのをやめ、破壊する事にしました」

「どういう事だ？」

工藤が慌てた顔で問い質した。大野も驚いている。

「そんな事をしなくても、竜の気も財宝も手に入るからです」

「そんな事が可能なのか？」

真人が裏切るつもりなのかと思った工藤は一瞬焦ったが、どうやらそうではないらしい事を知り安心した。

「器様を杉野森学園でお祀りし、竜の共鳴を起こすのです」

真人は狡猾な笑みを浮かべて言った。

## 第七章 儀式へ

岩手県の辰野神社の裏手の森を、泉進は歩いてきた。すでに日暮れ時で、辺りは薄暗い。

「間違いない。この先に雅がある……」

やがて前方に祠が見えて来た。

「あれか」

泉進は歩を速め、祠を目指した。

雅は、泉進の気配を感じる事はできなかったが、祠の外で鳥達が騒ぐのを聞きつけ、外に目を向けた。

「あれは……」

雅は泉進が歩いて来るのを見た。

「遠野のジイ様か。どうしてここがわかった？」

泉進も雅に気づいたようだ。

「ほオ。さすがの小野雅も、そこから出られんのか？」

「余計なお世話だ。何をしに来た、ジイさん？」

雅は泉進を睨んだ。泉進はフツと笑って、

「強がりを言うな、小僧。顔がやつれておるぞ。いろいろ試して、どうにもならなかったようだな」

「フン」

雅は更に泉進を睨みつけた。

「からかいに来たのなら、帰ってくれ。俺はそれほど暇ではない」

「まア待て、雅。仁斎からの連絡で、何としてもお前を助けてくれと言われているのだ」

「仁斎のジイさんに？」

雅は意外な話に眉を吊り上げた。

「無論、藍ちゃんもお前が助け出されるのを願っておる」

「……」

雅は久しぶりに藍の事を思い出した。

「今、小野宗家は大変な事に直面している」

「辰野親子の事か？」

泉進は結界に近づき、

「お前は何故ここに囚われたのだ？ 実人みひとは何か言っていたか？」

「いや」

泉進は結界を調べ始めた。

「見た事もない結界だな。これは特殊だ」

「根ねの堅州国かたすくにに行けない。この空間はどことも繋がっていないようだ」

雅の言葉に泉進は何か気づいたようだ。

「そういう事か」

「何だ？」

雅は急に笑い出した泉進に尋ねた。泉進は雅を見て、

「単純な事よ。お前が囚われているのはまさに異空間。どうじゃ、  
わかったか？」

「むっ？」

雅は謎かけのような泉進の言葉によって、ある事に気づいた。

「そういう事か」

「わかったようじゃな、雅」

泉進は結界から離れた。

「畏は単純な程気づかぬものよ」

「そのようだな」

雅は意を決して結界に近づいた。スーッと空間に溶け込むように消える雅。

「掴んだようだな」

泉進はニヤリとした。次の瞬間、雅は結界の外に姿を現した。

「ようやく出られたな」

泉進の言葉に雅は苦笑いした。

「こつも単純な畏だとは思いましなかった」

泉進は真顔になり、

「その結界の中は異空間。すなわち、根の堅州国と同じ。そこから出るのに根の堅州国に行こうとしても、それは無理な話。つまり、根の堅州国から戻るようにすれば良いだけの事」

「助かった。礼を言う、ジイさん」

雅は頭を下げた。泉進はフツと笑い、

「お前に礼を言われる日が来るとは、思いもしなかった。長生きはするものだな」

「相変わらずだな」

雅は歩き出した。

「どこへ行くつもりだ？」

「言うまでもない。礼をしに行く」

「待て、雅」

しかし、泉進が止める間もなく、雅は根の堅州国に入ってしまった。

「全く、小野の連中は、どうしてこうも勝手な連中ばかりなのか…」

泉進は呆れていた。

東京千代田区にある辰野神教の本部では、「器様」の移動の準備に取りかかっていた。

「父上」

実人が小声で真人まひとに話しかけた。

「どういづつもりです？ 打ち合わせしていたのと段取りが違います」

「これでいいのだ。大野と工藤が、何やら裏で密約をしているらしいのだ」

「密約？」

実人は眉を吊り上げた。真人はニヤリとして、

「まとめて我が神の生け贄となってもらう事にした。そのつもりで

いってくれ」

「はい」

実人はまた無表情に戻った。

「出発するぞ」

彼等はビルの地下駐車場に乗りつけられたキャンピングカーに乗り込んだ。

「祭壇も備え、全ての祭具も揃えてある。杉野森学園に強行突入し、祭事を始めてしまえば、竜の共鳴により杉野森学園は崩壊し、我が神が降臨される」

真人は嬉しそうに呟いた。それを冷めた目で、実人は見ていた。夕闇の中、キャンピングカーが走り出す。その後を工藤代議士と大野組組長の犬野寛を乗せた大型リムジンが続いた。

「先生、あの親子、何か企んでいますよ」

大野が囁く。工藤はニヤリとして、

「わかっている。そうそう思い通りにはさせんと答えた。」

藍はどうしてもついて行くと言う薫を説得するのを諦め、彼女をバイクの後ろに乗せると、神社を出た。

「杉野森学園に、剣志郎が運ばれている……」

藍がそう呟くと、

「藍さんは、その人の事が好きなんですね」

「え？」

いきなり薫が言ったので、藍は動揺した。

「そ、そんな事ないですよ。付き合いは長いですけど」

「そうですか」

薫は嬉しそうに言った。そして、

「父と兄がもう取り返しがつかない状態だったら、その時は……」

「え？ 何か言いました？」

藍は大声で尋ねた。薫は首を横に振って、

「いえ、何も」

「そうですか？」

藍は薫の妙な気を感じて、不安だった。

(この人、何かするつもりだ。でも、それがわからない……)

結界を出られた雅が、そのままいなくなったという泉進からの連絡も気になった。

(雅が岩手の祠に閉じ込められていた意味は何だろうか。辰野親子にとって、雅の存在は、邪魔だったの?)

謎は尽きない。邪魔なら殺してしまった方が手間が省ける。でもそうしない理由。そして、生け贄にするなら、何故岩手に足止めしたのか？

(とにかく、今は剣志郎の救出が最優先!)

藍は前を見据え、ハンドルを握り締めた。

仁斎は、泉進と話を続けていた。

「そんなに簡単に雅を見つけられたのも気に入らん」

「そうだな。辰野親子、儂らが思っているほど、強固な一枚岩ではないのかも知れん」

泉進の言葉に仁斎は眉をひそめた。

「どういう事だ？」

「元々真人は欲が優先する男。しかし、実人は本当に辰野神社を盛り立てようと考えている男。親子であっても、譲れぬものがある、という事だ」

「なるほどな」

泉進は続けた。

「ならばこそ、お前のところに現れた辰野薫の存在が生きて来る」  
「実人が何かに利用しようとしているのか？」

「そこまではわからんがな」

仁斎は溜息を吐き、

「いずれにしても、雅が向かったのは恐らく辰野親子のところだ。」

あいつの性格からして、きつちり礼をするつもりだろうな」

「まあ、それも余興だ」

「面白がるな、泉進！ お前のせいだぞ」

仁斎は本気で怒った。

「わかつておる。雅に無茶はさせんよ」

「頼むぞ」

仁斎は携帯を袂にしまい、外に出た。

「藍、うまくやってくれよ」

「どこへ連れて行く気だ？」

キャンピングカーの後部座席で、手首と足首を縛られ、目隠しをされた剣志郎が尋ねた。

「いらん事を言うと、その口も塞ぐぞ」

実人が冷たい口調で言う。剣志郎は、

「俺をどうするつもりだ？ 生け贄にでもするのか、お前らの神の？」

「忠告を聞かん男だ」

実人は剣志郎に近づき、口をこじ開けてハンドタオルをねじ込んだ。

「フゴフゴ……」

口を塞がれた剣志郎は、大人しくなった。

（こいつら、何をするつもりだ？）

彼はタオルを押し出そうとして舌を動かしたが、全く無駄だった。

（母さんに逆らったせいか……）

剣志郎は剣志郎で、母美月の言葉に反抗した事を悔いていた。

（藍……）

そんな時、誰よりも早く思い浮かぶのが彼女だとわかり、剣志郎は悲しくなった。

（また、迷惑をかけているのかな、あいつに？）

彼は、九州での入院騒ぎも、吉野での事も、藍に申し訳ないと思

っている。

（結局、俺は藍を助ける事ができないどころか、あいつに迷惑ばかりかけて……）

涙が出そうなくらい悔しかった。

「実人、もうすぐ学園に到着する。準備は良いか？」

真人の声がした。

（学園？ もしかして、杉野森学園に向かっているのか？）

剣志郎は嫌な予感がした。

「誰だ、あいつ？」

キャンピングカーを運転している大野組の組員が、道路を塞ぐように立っている白装束の男に気づいた。

「あれは小野雅ではないか！？ あの結界を出たのか？」

真人が驚きの声をあげた。

「どういう事だ、実人？」

真人は怒りの目を実人に向けた。しかし、実人はそれには答えず、組員に、

「車を止めてくれ。始末して来る」

「はい」

キャンピングカーは停止した。実人はドアを開いて外に出た。

「よくあの結界から出られたな。それだけは褒めてやろう」

実人は雅に近づきながら言った。雅はニヤリとし、

「とんだ子供騙しだった。もう少しで引つかかるところだったよ」

「ほお」

実人の身体から、竜の気が噴き出した。

「力の差は歴然としているのだぞ、小野雅。貴様は馬鹿なのか？」

「馬鹿かも知れんな。だが、お前が思っているような馬鹿とは違うぞ」

互いに挑発し合う二人を、組員は息を呑んで見ていたが、  
「車を出してくれ。ここは実人に任せる」

真人の言葉にハツとし、キャンピングカーをスタートさせた。

「む？」

雅は、車が動き出したのに気づき、

「何だ、お前は途中下車か？」

「心配いらん。すぐに追いつく」

実人の竜の気は、雅に向かって突進した。

「同じ手は通用しない」

雅は竜に掴まれる寸前に、根ねの堅州国かたすくにに消えた。

「何！？」

実人は周囲を見回した。雅はどこにもいない。

「おのれ！」

実人は竜の気を身体に巻きつけ、雅の奇襲に備えた。

「は！」

雅は実人の頭上に現れ、黄泉剣よもつゝるぎで斬りつけた。

「ぐっ！」

実人は右肩を斬り裂かれ、片膝を着いた。

「行け！」

竜の気が雅を襲う。雅は根の堅州国に消える。

「埒らちが開かん」

実人は気の量を増やした。彼自身が竜の気で見えなくなりそうだ。

「うお！」

今度は背後にいきなり雅が現れ、実人は背中から剣を突き刺された。

「終わりだ」

雅が言った。しかし、実人は、

「愚かな。闇は光に決して勝てぬと言ったはず」

「何！？」

雅は剣を見た。剣は光で溶かされ、実人には届いていなかった。

（椿の時と同じか！？）

彼は慌てて実人から離れた。

「小野雅。貴様は生かしておこうと思った。我が同志としてな。し

かし、それはもうやめだ」

「同志だと？」

実人の奇妙な発言に、雅は眉をひそめた。

「死ね、小野雅！」

実人が竜の気を纏ったまま、風のような速さで雅に襲いかかった。

「くっ！」

雅はその突進を黄泉剣で受けたが、剣は砕け、身体は後ろに跳ね飛ばされた。

「止めだ！」

再び実人が突進した時、何かが彼の前に現れ、気を弾いた。

「お前は！？」

そこには光り輝く剣を構えた藍が立っていた。

「ぬ……」

実人は、藍の後ろに薫の姿を見つけた。薫は怯えた目で彼を見ている。

「大丈夫、雅？」

藍は実人を睨んだまま、声をかけた。

「すまん、藍」

雅は素直に礼を言った。すると藍は、

「これは出雲の時のお返しよ」

藍の返答に雅はフツと笑って立ち上がった。

「形勢不利だな」

実人はそう呟くと、竜の気を翼のように広げ、飛び去ってしまった。

「兄さん！」

薫が涙声で叫んだ。

「雅……」

藍は目を潤ませて彼に近づいた。

「早く後を追うんだ、藍」

雅は根の堅州国に消えた。藍はハツとして薫を見て、

「私達も急ぎましょう、薫さん」

「はい」

薫は大きく頷いて答えた。

安本は、美月との話をすませ、理事長室を出たところだった。

「お送りしますよ」

「ありがとうございます」

美月は、剣志郎の事が心配なのか、目を潤ませたままである。

「さ、行きましょう」

安本が美月を促した時、外でタイヤのきしむ音が聞こえた。もうすでに生徒は全員下校し、教師もいない。

「誰が？」

安本は廊下の窓から外を見た。すると、高等部の玄関に向かって、キャンピングカーとリムジンが走って来るのが見えた。

「あ、あれは、工藤の車です」

美月が言った。安本はギョツとして、

「代議士の工藤ですか？」

「はい。もしかして……」

美月は、剣志郎が乗せられていると考え、走り出した。

「ああ、美月さん！」

安本が美月を追った。

「何事だ!？」

玄関から原田事務長が飛び出して来た。キャンピングカーとリムジンは、その前に停車した。

「まだ人がいたか。まあ良い」

キャンピングカーから真人が降りて来た。原田は、

「何だ、お前達は!？」 警察を呼ぶぞ!

「それは無駄だ、やめておけ」

リムジンから、工藤と大野が降りて来た。

「あ、貴方は……？」

さすがに工藤の顔には覚えがあった。原田は後ずさりした。

「何の真似ですか、工藤先生？」

工藤はその問いかけに、

「大人しくしていてもらおうか。これから、竜の気と呼ぶのだからと狡猾な笑みを浮かべて答えた。

「器様をここに」

真人の命令で、組員の二人が、剣志郎を連れ出した。

「け、剣志郎君！」

原田はそれを見て驚愕した。

「あんた達が、剣志郎君を誘拐したのか!？」

怒りの形相で原田は叫んだ。

「事務長、逃げて下さい！ こいつらは危険です！」

剣志郎はそう叫びたかったが、タオルが邪魔でできない。モゴモゴ言っのが精一杯だった。

## 第八章 儀式開始

「ジイさん、死にたいのか？」

大野組の若い組員が凄む。しかし、何百人と手強い生徒達を相手にして来た原田には、そんな虚仮威こけおどしは通用しない。

「誰がジイさんだ、洩垂はなたれ小僧が！ 引っ込んで！」

原田の方が迫力があつた。組員は思わず後退あとすゝむりしてしまった。

「……」

剣志郎は焦っていた。

（こいつら、只のヤクザじゃないんです、事務長。頼むから逃げて下さい）

そんな剣志郎の祈りも通じていない。

「威勢がいいな、あんたは。だが、本当に死にたくなければ引っ込んでいた方がいいぞ」

工藤が進み出て原田を睨んだ。原田は工藤を見て、

「一人の間人を誘拐しておいて、何だ、その言い草は？ あんたが国会議員だろうが、与党の大物だろうが、そんな事は私には関係ない。剣志郎君を解放して、とつとこの学園の敷地から出て行け！ するとそこへ、美月と安本が駆けつけた。

「剣志郎！」

美月は剣志郎の姿を見つけて叫んだ。

「ほお、これはこれは。感動の親子対面ですな」

真人まことがニヤリとして美月に言う。美月は真人を睨んで、

「貴方達は、一体何をするつもりです？」

「何を？ 竜を起こしに来たのですよ。貴女も同じ事を考えていたのでしょうか、奥さん？」

真人の言葉に美月は凍りついたように顔を強ばらせた。

（何だ？ どういう意味だ？）

剣志郎は美月を見た。美月はそれに気づき、顔を俯かせた。

「この学園の責任者として、あなた方の行動は見過ごせませんね。警察に連絡をして下さい、事務長」

安本は工藤と真人と大野を順番に見ながら言った。

「はい」

原田が建物の中へと走った。安本はそれを見届けてから、

「貴方達は勘違いしている。この地に眠る竜は、眠らせていてこそ  
の竜です。起こしたりしたら、どんな事が起こるのか、わかっ  
ているのですか？」

「わかっているから、こうして来ているのですよ、理事長」

真人は真顔で答えた。そこへ実人<sup>みひと</sup>が追いついて来た。

「来たか、実人。儀式を執り行うぞ」

「はい」

実人は美月と安本を氷のような目で一瞥してから、キャンピング  
カーの中へ入って行った。

「何だ、あの男……？」

安本は、この中の誰よりも、実人に対して恐怖を感じた。

「この地に眠る竜は、国をひっくり返す程の力を持っている。私は  
この国を手に入れたい。だから、竜を起こす」

真人の言葉に工藤と大野が仰天した。

「何を言い出すのだ、辰野！ お前は……」

工藤は真人に掴みかかろうとしたが、

「下郎め、お前は神の生け贄に過ぎぬ」

と言い放ち、実人と同じように身体から竜の気を発すると、工藤を  
縛り上げ、絞め殺してしまった。

「……」

安本と美月は息を呑んだ。大野と組員達は、歯の根も合わない程  
驚いている。工藤の遺体は白目を剥いたままでその場に倒れた。

「次はお前だ、大野。よくも私達を裏切ろうとしたな」

真人が嬉しそうな顔で大野を見た。

「ま、待ってくれ、裏切ったりしないから！ 待ってくれ！」

しかし、真人は全く聞く耳を持たなかった。大野も、そして組員達も、次々に真人の竜の気で殺された。

「何という事を……」

安本は怒りに震えて、真人を睨んだ。真人はクククと低く笑い、「安心しなさい。我が神は穢れた者を生け贄とする。貴方達には生け贄の資格がない」

「何？」

安本は眉をひそめた。

「工藤は金と欲に染まった、政治家の風上にも置けぬ悪党。大野は、今まで何人東京湾に沈めて来たかわからない程の殺人者。どちらも、穢れに穢れ、我が神の生け贄に相応しく、この世に不要な存在」

真人は得意そうな顔で言った。

「バカナ……。そんな神がいるものか！」

「いるのさ。この地にね」

真人は、学園の裏を指差した。美月は、組員が倒されて実質的に解放された剣志郎に駆け寄ろうとした。

「動くな！」

真人は美月に怒鳴った。美月はギクツとして立ち止まった。

「父上、準備ができました」

衣冠束帯に着替えた実人がキャンピングカーから櫛と玉串を持って現れた。

「邪魔はせんように。この者達と同じ事になりますぞ」

真人は実人にもがく剣志郎を担がせ、学園の裏へと歩き出した。

「命が惜しくなければ、来るがいい」

実人はそう言い捨て、去った。そこへ入れ違いに藍と薫がバイクで現れた。

「理事長！」

藍はバイクから降りると、安本に駆け寄った。

「連中は竜の眠る祠に向かっています」

「わかりました」

藍はチラツと美月を見た。二人は初対面ではないが、互いに気ま  
ずかったので、会釈しただけだった。

「この人達は……？」

薫が工藤達の遺体を見て、藍に尋ねた。

「竜の気で殺されたようです」

藍の答えに、薫は蒼くなった。そこへ原田が戻って来た。

「警察はすぐ来ます」

彼は安本に報告しながら、工藤達の遺体に気づいてギョツとした。

「連中が？」

原田は藍を見て尋ねた。藍は黙って頷き、

「皆さん、危険ですから、学園の敷地から出て下さい」

「はい……」

原田は唾然としたままで、安本に促されると、美月と共に学園の  
門へと歩き出した。

「藍さん」

美月が立ち止まって言った。

「はい」

藍も立ち止まった。

「剣志郎をお願いします」

美月は深々と頭を下げた。藍は、

「わかっていきます。必ず」

と言い、薫と目配せして、学園の裏に走った。

「雅……」

藍は姿を消している雅の事が気になっていた。

一方仁斎は、竜が起きてしまった時の事を考え、学園全体を結界  
で封じるための準備をして、神社を出た。

「何かあったようだな。泉進、頼むぞ」

仁斎はそう呟き、学園を目指した。

泉進は新幹線で東京を目指していた。

「間に合わんかも知れんな」

彼は雅が閉じ込められていた祠で、ある物を見つけていた。それを白い布に包み、持って来ている。

「もし、これが奴らの言うご神体であれば、姫巫女流でも太刀打ちできぬ。何としても、あの土地の竜の気は目覚めさせる訳にはいかぬ」

泉進は両手の拳を強く握りしめた。

（そして雅を岩手に封じた理由。その理由が儂の読み通りだとすれば、一つだけ可能性がある）

泉進の言う可能性とは何であろうか？

真人と実人は、祠の前に来ていた。

「おお」

剣志郎が近づいたせいで、祠が震動している。真人はその様子を見て、

「まさしく読み通り。そして、あの古文書に書かれていた通りだな、実人」

「はい」

実人は剣志郎を地面に寝かせると、目隠しを取り、タオルを口から引き抜いた。

「貴様、解け！」

「五月蠅い。騒ぐと、またこれをねじ込むぞ」

実人は冷静な口調でタオルを剣志郎の頬に押し当てた。

「くっ……」

タオルを口にねじ込まれていると、呼吸をするのも辛い。それを思っ、剣志郎は黙った。

「何をするつもりです、兄さん！」

薫が現れた。実人は薫を見て、

「邪魔するな。今度は平手打ちではすまさんぞ」

「……………」

薫は涙を流していた。真人が、  
「辰野神社の厄介者が、ノコノコとこんなところまで来おって。身の程を知るがいい」

「お父さん！」

薫は涙声で叫んだ。

「何をしているの、貴方達は！」

藍が現れた。剣志郎は藍の声を聞きつけ、

「藍！」

と叫んだ。すると実人が、

「騒がないで下さい、器様」

と言いながら、剣志郎の脇腹を蹴った。

「ぐうつ……………」

剣志郎は地面をのたうち回った。藍は実人を睨み、

「今度はあの時のような訳にはいかないわよ」

「それはどうかな」

実人はあくまで無表情である。

「神剣、草薙くさなぎの剣！」

藍の右手に光の剣が現れた。実人はそれを見て、

「なるほど。段階としては、本当は十拳の剣を出すのが姫巫女流のはずだが、もはやそのような余裕はないと判断したか」

「うるさい！」

藍は走り出し、実人に接近した。

「懲りない女だ」

実人は竜の気を出し、藍を縛ろうとした。藍がそれをかわそうとした時だった。

「何！？」

実人の身体を黒い剣が貫いた。

「グフツ……………」

実人は口から血を吐いた。彼の後ろには、根ねの堅州国かたすくにから現れた

雅がいた。彼の黄泉剣よもつねぎが、実人を背中から貫いたのだ。

「今度は避けられなかったな」

雅はニヤリとして、剣を根元まで突き刺した。

「ぐおお……」

実人は再び血を吐いた。

「兄さん！」

薫が叫んだ。すると真人が、

「愚かなり、小野雅。実人はそのような穢れた剣では殺せぬ」

「何？」

雅が真人に気を取られた瞬間、実人は剣から抜け出し、竜の気を雅に放った。

「くっ！」

雅は傷を負いながらも、根の堅州国に逃げた。

「この程度では、私は死なぬ」

実人は何かを唱えながら、傷口を手でさすった。すると、光が収束し、傷が塞がってしまった。

「まさか……」

藍は驚愕していた。

（姫巫女流にも、治癒の祝詞はあるけど、あれほど急速に治す事はできない……）

「ここから先は、何人たりとも入る事を許さぬ」

実人はまた何かを唱えて、真人と剣志郎、そして祠のみを囲むように結界を張ってしまった。

「くっ！」

藍はその結界を剣で斬りつけたが、只弾かれただけだった。

「兄さん、やめて！ こんな事をして何になるのよ！？」

薫が結界に縋りついて怒鳴った。しかし実人も真人も、全く振り向かない。二人は剣志郎を祠の前に寝かせた。すると、更に震動が大きくなり、学園の建物までが揺れ始めた。

「どうすればいいの……？」

藍は呆然としていた。

安本と原田と美月は、建物が揺れているのに気づいた。

「これは一体？」

「理事長、ダメです。外にいないと」

学園の敷地に戻ろうとする安本を原田が止める。

「……」

黙り込んでいた美月が、意を決したようにいきなり走り出した。

「ああ、竜神さん！」

原田は美月が学園の中へと入って行ってしまつてしまつて叫んだ。

「事務長、私はここの責任者です。行かせてもらいますよ」

安本は原田の手を振り切り、美月を追った。

「どうすればいいんだ？」

原田は途方に暮れた。その時、警察車両が数台到着した。

「誘拐犯はどこです？」

刑事の一人が原田に尋ねた。

「この中ですが、今は危険なので入らない方がいいです」

「は？ どういう事です？」

からかわれていると思ったのか、刑事はムツとして尋ねた。

「どうした、原田君？」

そこへ仁斎がやって来た。原田は地獄に仏だ、と思い、

「ああ、仁斎さん。大変なことになりました……」

「わかつておる。ここは頼んだぞ」

仁斎はそれだけ言うと、敷地に入って行った。

「何ですか、今の老人は？」

刑事はますます怒りの形相で原田に詰め寄った。

「ハハハ、いや、その、えーとですね……」

人生始まって以来のピンチだと原田は思った。

剣志郎の身体の中の竜の気が現れ、結界の中を飛び回った。する

と遂に祠が崩れ、注連縄が切れてしまった。

「うっうっ！」

剣志郎が、暴れる竜の気に呼応するように苦しみ出した。

（時間がかかると、剣志郎が保たない。どうすればいいの？ 早く来て、お祖父ちゃん！）

藍は心の中で叫んだ。

仁斎は学園の外周を見ていた。

「あの時かけた封印が、何者かに根こそぎ破られているな。やはり、そこまでわかつているのか」

仁斎は、以前泉進が見つけた土を掘り返した跡を見ていた。そこは昔、地鎮祭の時に仁斎が封印のために榊を植えたところだったのだ。それが皆、引き抜かれていたのである。

「この地を我が流派の気が支配する地にすれば、例えどんな神であろうと、決して藍は負けぬはず」

仁斎はそう呟き、榊を植え始めた。

震動は学園全体を揺るがし始め、窓ガラスが割れた。美月はその破片を避けながら、祠へと走った。安本も破片をかわしながら、美月を追った。

「剣志郎……」

美月は目を赤くしていた。

「これは予想以上だな、実人。これなら、日本どころか、世界を支配できるぞ！」

真人は狂喜して叫んだ。

「そんな事は絶対にさせない！」

藍はそう言い放つと、

「姫巫女流奥義、姫巫女二人合わせ身！」

と究極奥義を使った。

「姫巫女流の最終奥義か……。しかし、無駄よ」

真人は藍を嘲笑った。藍の身体に倭国の女王である卑弥呼と台与が降臨した。すると、更に剣志郎が苦しみ出した。

「あっ！」

藍は泉進の言葉を思い出した。

『つまり、彼奴あやつが藍ちゃんを諦めて、別の女に心を向けたために、藍ちゃんと彼奴の気の流れに不都合が生じたという事だ』

「いけない……」

しまったと思つた藍だったが、剣志郎を助けるためには、究極奥義で戦うしかない。

「無駄かどうかは、やってみなければわからない！」

藍は左手を振り、

「神剣十拳の剣！」

と唱え、剣を出した。そして、

「神剣合わせ身！」

椿に教わつた方法。藍は神剣を合わせながら二人の女王も合わせるイメージを浮かべた。

「姫巫女の剣！」

その剣が出た時、初めて真人が振り返った。

「何だ、あれは？」

彼は姫巫女流を研究し尽くしていると思つていたが、その剣だけは知らなかったのだ。

「気に病む必要はない。何をしても無駄だ。この結界は破れぬ」

「はい」

真人の言葉に真人は再び前を向き、真人と共に祝詞を唱え始めた。

「何？」

藍には聞いた事のない祝詞だ。

「何、これ？」

気分が悪くなった。しかも、周囲に何か得体の知れない霊体が集まり始めている。

「何が起ころうとしているの?」

藍と薫は、その異様な状態に周囲を見渡した。

## 第九章 竜神降臨

真人は不意に祝詞のりこを唱えるのをやめた。

「何者かが邪魔をしている。私はそちらに行く。お前はここを守れ」

「はい」

真人は真人を見ずに答えた。真人は結界からフツと消えた。

「何？」

藍はそれを見てギョツとした。

（何、今の？ 瞬間移動？）

「藍さん、父がどこかに行きました。誰かが外にいます。父はその人を殺しに行ったのかも知れませんが」

薫が答えた。藍は薫を見て、

「どういう事ですか？」

「私にはわかるんです。嫌だけれど、わかるんです」

薫は泣きじゃくりながら言った。真人はそんな薫を一瞥したが、そのまま祝詞を唱え続けた。

「外に？ もしかして……」

仁斎が狙われている。そう直感した。

「でも、お祖父ちゃんなら大丈夫」

藍はそう思い、結界を破る方法を考えた。

「……」

真人は、藍の事より、姿を消した雅の方が気になっていた。

（奴はどこに行った？）

雅が岩手の祠の結界を出たのは承知している。それは予定通りだった。しかし、その後で根の堅州国を出入りしての攻撃には、真人も身の危険を感じたのだ。

（奴の剣では俺を殺す事はできない。しかし、あの方法で小野藍が俺を攻撃したら、ひとたまりもない）

真人は、雅と藍が共同して攻撃して来た時の事を想定していた。

「兄さん、あれほど反対していたのに、どうしてお父さんと一緒にいるのよ？ 何があったの？」

薫の声が響いた。しかし実人は微動だにしない。

「兄さん、答えて！」

薫の声は、実人に届いていなかった。

真人は、瞬間移動した訳ではない。辰野神教の結界から出ると、一瞬姿が消えたように見えるのだ。彼は裏から学園の周囲を探り始めていた。

「ぬ？」

真人は仁斎が植えた榊を見つけた。

「何をするつもりだ、小野の者達め」

真人は榊を無視し、仁斎を探した。

「儂を探しているのか、辰野？」

仁斎は物陰から姿を現した。日がすっかり落ちてしまった今、仁斎の表情ははつきりしない。学園内はあちこちに照明があるが、外は外灯しかなく、お互いの顔がぼんやりと見える程度だ。

「自分から殺されに来るとは、愚かな。いや、潔いと言っべきかな、小野仁斎？」

真人は勝ち誇った顔で言った。

「口だけは達者なようだ。所詮お前は息子の力を頼りにしている情けない父親に過ぎんかな」

「何を？」

真人はムツとした。当たっているだけに余計に腹が立つのだ。確かに儀式は実人なしにはできない。

「悔しいのなら、私を仕留めてみよ。お前には無理だろうがな」

仁斎は始めから真人をおびき寄せるためにわざとわかるように動いていたのだ。真人は畏にはめられた事に気づいていない。

「剣志郎！」

美月が現れたので、藍はびっくりしていた。

「お母さん、危険です、離れて下さい」

藍は美月を見て言った。しかし美月は、

「全ては私の愚かさが招いた事です。危険は覚悟の上です」と言つと、更に結界に近づく。

「剣志郎、気をしっかり持って！ 苦しいと思うと余計に苦しいわ。貴方は自分の気持ちに素直に生きればいいのよ。そうすれば、竜の気は鎮まるのよ」

美月は涙を浮かべて訴えた。すると実人が、

「邪魔だ。どけ！」

と言い、竜の気を放った。

「危ない！」

藍がそれを防ごうとして剣を振るつたが、間に合わなかった。

「私は剣志郎とは違うわ、辰野実人！」

美月の身体からも竜の気が放たれ、実人の気とぶつかり合った。

「何？」

実人の無表情の顔が崩れた。彼は驚いていた。

「私は、竜神家の正統な継承者。但し、私の父で神社は譲り渡したから、この程度の事しかできないけど」

藍も薫も、美月が竜の気を身に纏っているので、仰天していた。

「母さん……」

剣志郎は美月に言われた事を実行に移した。

（藍……）

彼は自分の気持ちを素直に外に向けた。藍を愛している、誰よりも大切に思っていると。

「？」

藍は剣志郎の竜の気の変化したのに気づいた。

「あれほど猛っていたのが、急に落ち着いたみたい……」

と同時に、藍は剣志郎の心の波動を感じ、赤面した。

（やだ……）

剣志郎が藍にストレートに愛を告白するような感覚に囚われた。

「何、今の？」

今の波動が、もし美月にも感じられるのなら、藍は恥ずかしくて逃げ出したいくらいだったが、美月は慈愛に満ちた顔で藍を見ていた。

「藍さん、剣志郎の本当の気持ち、受け止めてあげて」

「は、はい」

恥ずかしがっている状況ではない。剣志郎は場合によっては命を落としてしまいかも知れないのだ。藍は剣志郎の波動を、自分の心に受け入れた。

「む？」

実人も、剣志郎の気が変質したのを感じた。

「そのような事で、この大事、損なわせるものか！」

実人は懐から玉串を取り出した。

「何？」

藍はその玉串から途方もないパワーを感じた。

「これは、縄文の気？」

大学生の時、一人旅で訪れた三内丸山遺跡で感じたのと同じ気だ。

「ああ！」

薫が叫んだ。祠が崩れた下から、光が出始めたのだ。実人が何事か呟くと、再び剣志郎の竜の気が騒ぎ始め、学園の鳴動が大きくなった。地面から出て来た光は、少しずつ増え、竜の姿になり始めた。「うわあああ！」

剣志郎の竜の気が激しく結界内を暴れ回り、剣志郎自身ものた打ち回った。

「剣志郎！」

藍と美月が異口同音に叫んだ。

「やめて、兄さん！ お父さんの願いなんか、かなえる必要のないのよー！」

薫が叫ぶ。しかし実人は祝詞を唱え続け、学園の下に封じられて

いた竜の気は、巨大な竜に姿を変えた。

「させない！」

藍は剣を振り上げ、

「神剣乱舞！」

と剣撃を結界にぶつけた。

「無駄だ」

実人はチラツと藍を見て呟いた。

真人は、仁斎と睨み合いを続けていたが、学園内の揺れが大きくなつたのを感じ、

「ここで争っている場合ではないぞ、ジジイ。可愛い孫が死んでしまふぞ」

と仁斎を挑発した。

「そうだな。助けに行くか」

仁斎は真人に背を向けて歩き出した。真人はニヤリとし、

「この私に背を向けるとは、愚かなジジイだ！」

と、竜の気を放った。しかし竜の気は仁斎を襲うどころか、素通りし、標的を失ったようにウロウロし始めた。

「ど、どういう事だ？」

真人は啞然とした。仁斎は背中を向けたままで、

「お前らが、千代田区の本部で藍を罫に掛けた礼だ。辺り一帯、姫巫女流の結界。後は、お前の息子が陣取っているところをぶち壊せば、任務完了だ」

「何だと!?!」

真人は眩暈めまいがしそうだった。

「それからな、お前にジジイ呼ばわりされる謂れはないぞ、クソジジイが」

仁斎はそう言い捨てると、学園内に消えた。

「ぬっつっ……」

真人は、もはや勝敗は決したと感じていた。だが、実人は、真人

とは違う事を考えていたのである。

藍の攻撃は執拗に続いていたが、結界は破れなかった。

「所詮姫巫女流は人神の流派。我が神は光の神で最強なのだ。次元が違う。無駄な足掻きはやめろ」

実人は祝詞を唱えるのをやめて藍を見た。

「もはや何をしても詮無き事だ。儀式は完了した。光の神が降臨される」

「何ですって？」

藍と美月、そして薫が叫んだ。

「むっ？」

仁斎が駆けつけた時、まさに剣志郎の竜の気と学園に眠っていた竜の気が融合しようとしていた。

「くっ、遅かったというのか!？」

仁斎は齒ぎしりした。

「見よ！ 遂に新たな時代が幕を開くのだ。我が神によって！」

実人が叫んだ。竜の気は完全に融合し、結界を破り、上空へと上がって行く。

「そんな……」

藍はそれを呆然として見ていた。

「剣志郎！」

美月は結界が消えると、すぐに剣志郎に駆け寄った。彼は気を失っていた。

「ふははは！ 我らの勝ちだな、実人！」

真人は狂喜しながら現れた。彼は仁斎にしてやられたと思っていたのだが、実人が見事に儀式を成し遂げたのを知り、態度を一変させていた。

「兄さん……」

薫は悲しみに打ち拉がれていた。

「私、何もできなかつた……」

止めどなく涙が流れる。彼女はそのままだ面に崩れるようにしやがみ込んでしまった。

「とうとう、我らが悲願が成就した。辰野神教が、日本を、いや、世界を統べる時が来たのだ！」

真人は大喜びしながら実人に近づいた。実人はまた無表情に戻り、狂喜する父親を見ていた。

「おのれ！」

仁斎は柏手を打ち、

「姫巫女流古神道奥義、よみどのおおかみ黄泉戸大神！」

と唱え、学園全体に黄泉戸大神の結界を張り巡らせた。しかし、

「手遅れだ、小野の者達。我が神はすでに最強。おのれ己らの結界など、児戯に等しい」

実人の言葉通り、あの黄泉よみの国の最高神であった建内宿禰たけしうちのすくねすら縛った結果が、まるで蜘蛛の巣のように簡単に破られてしまった。

「バカな……」

仁斎は目を疑った。

「これが最強の神の力……」

藍はもう完全に呑まれてしまっていた。仁斎ですら、諦めかけていた。

「ははははは！ 行くぞ、実人よ。東京を制し、日本を制し、世界を制するぞ」

真人は実人に言い、歩き出そうとした。

「まだです、父上」

実人の感情の籠っていない声が出た。真人は眉をひそめて、

「どういう意味だ、実人？」

「我が神は闇をご所望です」

実人の冷たい目が、真人を射るように睨んだ。

「何！？」

次の瞬間、竜の気はあつという間に真人に襲いかかり、彼を跡形もなく食らい尽くしてしまった。

「……………」

薫はそれを見てしまった。しかし、叫び声すら出ない。それほど驚いていた。美月も目の前で人が竜の気に食われるのを見て、固まったように動けなくなった。

「こ、これは……………」

そこへ安本が現れた。彼は持病が悪化したらしく、歩くのも辛いようである。いや、竜の気が彼を弱らせているのかも知れない。

「安本、離れている。それ以上近づくな」

仁斎が彼の様子に気づき、叫んだ。

「辰野実人、貴方、最初から父親を殺すつもりだったのね!？」

藍は怒りに震えて怒鳴った。しかし実人は、

「殺す? 違う。父上は神と同一されたのだ。これは父上がお望みだった事だ」

「何ですって?」

藍は実人が詭弁を弄していると思った。

「自分の父親を殺して、何という言い草だ、貴様は」  
仁斎が言い返した。

「何とも言う方がいい。我らの目的は光の神の復活。今こそそれを成し遂げる」

竜の気は上空で輝きを増し、その姿を実体化させた。それは紛れもなく、竜であった。

「神よ、お裁きを!」

実人は柏手を一回打った。すると竜は咆哮し、口から光の玉を放った。

「何!??」

光の玉は学園を直撃した。辺りが強烈な明るさに包まれ、杉野森学園高等部は、一瞬にして消えてしまった。爆発ではなく、消失したのである。

「まさか……………」

藍はもう何もなす術がないと思っていた。

「仁斎、藍ちゃん、まだ諦めるな！ 方法はある！」

泉進が大声で言いながら現れた。実人が彼を睨む。

「老いぼれ、もう来たか？」

「岩手に雅を閉じ込めた理由、わかったぞ、実人。一つは儂を東京から引き離すため、そしてもう一つは、雅を東京から引き離すため」  
「む……」

泉進の指摘が凶星だったらしく、実人の顔に焦りの色が浮かんだ。  
「そして、あの祠に面白いモノが残されていたぞ」

泉進は持っていた白い布を捲り、中から何かの動物の骨を取り出した。

「それは……」

実人は啞然としていた。

「こいつが、竜の正体。竜の本体の一部だ」

「何？ どういう事だ、泉進？」

仁斎が尋ねた。

「恐竜の骨。竜の正体は、太古の昔、この地上を席卷した恐竜だ。

そして、その骨を神として祀り、神気を集めたのが、縄文時代の神官達だ」

「……」

実人は黙って泉進の話の話を聞いている。

「この地の下にも、この竜の骨の別の部分が埋まっているはず」

「つまり、神は完全になつたという事だ。もう遅い」

実人が口を開いた。しかし、泉進は、

「いや、まだまだ。お前自身が、儂にヒントをくれていたのに気づいていないようだな。何故お前らは雅を閉じ込めたのか？ 生け贄にするなら、岩手に閉じ込める必要はないな」

「ぬ……」

実人はまた黙り込んだ。

「闇が閉じれば光が溢れる……」

薫が何かに取り憑かれたかのように呟いた。

「そう、それこそまさに答え。お前らが雅を恐れた理由。そして、何故岩手に閉じ込めたのかも同じ理由でだ」

実人は泉進を睨んだ。泉進はニヤリとして、

「その答え、儂が言うまでもないな。もうすぐ出る」

「何？」

実人は泉進の妙な言い回しに眉をひそめた。その時、雅がスーッと現れた。

「藍、偽物の光の神を潰すぞ。力を貸せ」

「え、ええ……」

唐突にそう言われ、藍は何が何だかわからなかった。

## 第十章 竜の足掻き

雅は実人を睨みつけて、

「光の最高神だと？ 光の神は闇を食らうだと？」

「その通りだ」

実人は無表情のまま答えた。雅はフツと笑って、

「お前らの神は光の神などではない。只、欲望のままに力を欲して、その力に任せて暴走し、挙げ句滅んだ恐竜共の無念を集積させた化け物だ」

実人の顔が怒りの形相になった。

「我が神を冒瀆するのは許さぬ。小野雅、お前の力を認めればこそ、岩手では殺さずにおいたのを理解していないようだな」

「ほオ。それはありがたい事だな」

雅は実人を挑発した。藍は雅の目的がわからず、二人の男の睨み合いに身が竦みそうになった。

「雅、そいつと遊んでいる暇はないぞ。まだこの化け物は、力を溜め込んでいる。早く決着をつけた方が良い」

泉進が口を挟んだ。雅はチラツと泉進を見て、

「焦るな、ジイさん。こいつはそんな簡単に殺してしまうのは惜しいくらいの獲物だ。それに、いろいろと礼をしたい。随分とこの俺をいたぶってくれたからな」

「減らず口を……。己の力を知らぬ事は、この上もないほどの愚かさだという事を知るが良い、小野雅！」

実人の身体から竜の気が発せられた。

「む？」

泉進はその様子を見て驚いていた。

「我が神は化け物ではない。最高の神なのだ。お前ら下賤の者共など、一瞬にして殺す事ができるのだ」

「こいつ、一体……」

仁斎も眉をひそめた。

「それほどの神であるなら、今すぐに俺を殺してみる。できはしないだろうがな」

雅は更に実人を挑発した。

(どういっつもりなの、雅?)

藍は不安そうに雅を見た。

「雅は何かを手に入れたようだな」

仁斎が藍に近づいて呟いた。

「手に入れたって、何を？」

藍は仁斎を見た。仁斎は雅を見て、

「竜を退治するための剣だ」

「えっ？」

藍は驚いて雅を見た。

「……」

実人も雅が何かを隠し持っていると感じたのか、挑発には乗らずに睨んでいるだけである。

「お前の挑発に乗る程、私は愚かではない。我が辰野神教を愚弄した罪は、死ぬ程度ではすまさんぞ」

「ではどうする？」

雅はそれでも挑発を続けた。

「お前は殺さぬ。お前の周りの者を殺す」

実人の目が藍に向けられた。

「くっ！」

藍は剣を構え直して、実人を睨んだ。

「我が神の邪魔をする者は全て滅する。すなわち、ここにいる者は皆、消す」

実人は、藍、仁斎、泉進、美月、剣志郎、安本、そして薫と見て行った。

「兄さん……」

薫は震えていた。

「貴方は、自分の妹まで殺すと言っの!？」

藍が怒鳴る。実人はそれには答えずに、

「神よ、お裁き下さい」

と柏手を一回打った。竜の気が輝きを増し、宙を舞った。

「藍、その剣を貸せ」

「えっ？」

雅の突然の言葉に、藍はキョトンとしてしまった。

「早く、時間がない」

「は、はい」

藍は剣を雅に渡した。すると雅は、

「いきなり本番では、どうなるかわからんが、方法はこれしかない」と呟いた。

「もしや、雅……」

仁斎が目を見開いた。

( 姫巫女流は、建内宿禰たけしうちのすくねが黄泉路古神道を創始して分かれるまで、今より激しい流派であった。その前に戻すつもりか？ その方法があったか…… )

しかし、その源流とも言うべき流派は、誰一人として見た事もなく、伝える書もない。

「お前は、姫巫女流が人神だから辰野神教より劣るような事を言っていたが、それはとんでもない間違いだぞ」

雅は姫巫女の剣で実人を指し示して言った。

「何？」

実人は眉間に皺を寄せた。

「確かに、今の姫巫女流はその通りだ。人神を祀っている。しかし、その源流は違う」

「!」

実人の顔色が変わった。何かに気づいたのだ。

「我が神は最強である!」

それでも実人はそう言い放った。竜が藍目がけて光の玉を吐いた。

「待っていたよ！」

雅はそう叫ぶと、姫巫女の剣を左手に持ち、右手に黄泉剣よみじつるぎを出した。

「まさか！」

藍は仰天した。嫌な記憶が甦る。吉野で力尽きて死んだ京都小野家の後継者である小野椿。彼女は光と闇の力を一つにした剣を振り、建内宿禰が纏っていた神気と妖気を吹き飛ばし、その結果命を落としてしまった。

「ダメ、雅、それはダメ！」

藍はあらん限りの声で叫んだ。しかし、雅は二つの剣を融合させ、新たなる剣を出した。

「これが姫巫女流の真の最強の剣だ」

雅はその剣を中段に構え、舞い降りて来る竜に向かった。

「ぬあああつ！」

剣の斬撃が、光の玉を弾き飛ばした。玉は夜空へと飛び、消えた。「バカな……」

実人は啞然とした。泉進が、

「やはり気づいたか、雅。お前が閉じ込められたのは、まさに光と闇が一つになるのを恐れての事。奴らの神は最強ではない。最強は、やはり姫巫女流よ」

と言った。雅はニヤリとし、

「そのようだな」

と答えた。

「雅、その剣は？」

藍は雅が死んでしまったと思ったので、恐る恐る尋ねた。

「これは以前椿が出したものは違う。やり方は一緒だが、段階が違っのさ」

雅は藍を見て答えた。

「まず、黄泉剣は、黄泉路古神道を修めた者でなければ、使いこなせない。そして、姫巫女の剣は、姫巫女流の正統後継者が出したも

のでなければ意味がない」

「つまり、その両方を使える雅だからこそできる最終奥義、という事だ」

仁斎が言い添えた。それを聞いて藍はホツとした。

「そして、融合する剣は、その力の配分がよくないとやはり術者に影響する。姫巫女の剣に見合うだけの黄泉剣が必要だ」

藍はその言葉にギョツとして雅を見た。雅が出した剣は、椿が「神魔の剣」と言っていたものと同じだが、その剣から、かつて感じた事のある妖気を見たのだ。

「それは……」

雅が長く根の堅州国ねすくににいた理由がわかった。その剣には、小野源斎、小山舞、そしてあの建内宿禰の妖気が宿っていたのだ。

「そんな事が、できるの……」

藍は、雅が宗家に戻って跡を継いだ方がいいのではと思っってしまった。

「面白い。本当に最強なのはどちらか、試してみるか？」

実人はその顔を兇悪な顔に変え、叫んだ。彼の周囲に得体の知れない霊体が集まって来ている。

「さつきから何かよくわからない霊体が集まって来ているようだけど、何かしら？」

藍は仁斎に尋ねた。

「これはこの地上で生まれ、絶滅した生き物の霊体だ。恐竜を始めとするな」

「……」

藍は何か空恐ろしさを感じた。

「確かに、姫巫女流は源流に遡れば、更に強くなろう。しかし、我が神は、それより更に古くから存在するのだ。その積み重ねの長さを知るがいい！」

竜にたくさん数の霊体が吸収されて行く。それにつれて竜は巨大化し、学園の敷地からはみ出す程になった。

「何だ、あれは？」

門のところで原田と押し問答をしていた刑事達は、夜空に現れた竜に気づいた。

「わわっ！」

百戦錬磨の原田も、さすがに度肝を抜かれた。

「さっきの閃光と言い、一体何が起こっているんだ？」

彼は安本達の身を案じた。

「人間の歴史など、この地球の歴史に比べれば、ほんの一瞬。その数倍の時を支配していた我が神の力、思い知るがいい！」

すでに竜は学園の敷地を覆い尽くし、夜空に君臨するかのようになり、巨大化していた。

「雅！」

心配になって藍が叫んだ。

「藍、もう一度姫巫女の剣を出せ。止めはお前に任せる」

「えっ？」

「早くしろ！」

雅の怒鳴り声に藍はビクツとして、

「は、はい！」

と答え、十拳の剣と草薙の剣を出し、姫巫女の剣にした。

「何が止めは任せるだ。まだ勝てる気にいるのか？ 愚かな」

実人は雅達の言動を嘲笑った。

「美月さん、手を貸そう」

仁斎は安本と協力して剣志郎を背負い、美月を伴って敷地から離れた。

「泉進、お前も離れろ」

「僕は大丈夫だ。お前は、その人達を頼む」

泉進は竜を睨んだままで答えた。

「わかった。死ぬなよ、泉進」

「当たり前だ」

泉進はニヤリとして応じた。

「嬢ちゃんも逃げる。あんたまで巻き込まれる必要はない」  
泉進は呆然としている薫に呼びかけた。

「は、はい」

薫が走り出した。その時である。

「お前は逃がさぬ。最後までこの兄に力を貸すのだ、薫！」

実人が竜の気で薫を縛った。

「キャツ！」

「させない！」

藍が走り、剣で竜の気を斬った。

「貴様！」

実人は次に邪魔をした藍に竜の気を放った。

「そんなもの！」

藍は竜の気を次々に斬り捨てた。

「おのれ！」

実人は激怒し、自ら藍に突進した。

「くっ！」

実人の蹴りが藍を襲う。藍はそれをかわしながら、反撃に転じた。

「ええい！」

姫巫女の剣が、実人の蹴りを弾いた。

「くっっ！」

バランスを崩し、実人は倒れた。

「薫さん、早く逃げて！」

「はい」

薫はまた走り出した。

「逃がさん！」

実人が立ち上がって叫ぶ。竜が咆哮し、薫に向かって下降した。

「薫さん！」

藍が走り出す。薫に迫る竜の巨大な口。

「ああ！」

藍は思わず目を伏せた。しかし、薫は竜に食われなかった。

「何？」

藍は薫の変化を見て、ギョツとした。

「ああ……」

薫がもがき苦しんでいる。彼女もまた、竜の気を纏っていた。

「まさか……」

藍は実人を睨んだ。実人はフツと笑い、

「薫も我が神の器うつわ様なのだ。竜神剣志郎ほどではないがな」

薫の竜の気が、彼女から離れ、竜に取り込まれた。

「ああっ！」

藍と雅は思わず叫んだ。竜が更に巨大化したのだ。

「おのれ、そういう事だったのか……」

泉進は歯ぎしりした。彼はその時、持っている恐竜の骨が、微かに震動している事に気づいた。

「これはもしか……」

泉進は、竜と藍達に気を取られている実人の背後に回り込み、祠のあつた場所に走った。

「薫さん！」

薫は竜の気が全て抜けてしまうと、バツタリと倒れ伏した。藍が慌てて駆け寄る。

「ああ、理事長！」

原田は安本が戻って来たので、ホツとして声をかけた。

「皆さん、ここを離れて下さい。それから、近隣の人達に避難命令を出して下さい」

「何が起こっているのですか？」

刑事が安本に詰め寄った。安本は、

「詳しく説明している時間はありません。学園でガス漏れが発生したとも言って、住民の皆さんを避難させて下さい」

「そんな……」

尚も説明を求めようとする刑事を無視して、安本は携帯を取り出した。

「安本と言います。警視総監に繋いで下さい」

仁斎は剣志郎を警察の車に乗せた。

「救急車の手配をしてくれ」

「はい」

有無を言わせぬ仁斎の迫力に、警官は何も言い返せずに従った。美月はその間ずっと、剣志郎を気遣っていた。

「わからぬか、小野雅。我が神の気は、日本ばかりではなく、世界各地にあるのだ。まさに無限に強くなられるのだ」

実人が言い放つと、雅は、

「わかつていないのは、お前の方だ。お前の神は、どこまで行っても所詮その程度だという事をな」

「何!?!」

実人はムツとしたが、雅の虚勢と思っただらしい。

「哀れな。見苦しいぞ。勝つ見込みのない戦いに、いくら強がってみせても、何も得るものはない」

「そうかな?」

雅はニヤリとした。

「言っただはずだ、お前の言う神は、偽物だと。その理由を教えてやるよ」

実人はせせら笑って、

「ほう。では教えてくれ」

と言り返した。

「姫巫女流の真の祭神は人神ではない。太陽、いや、この宇宙そのものだ。宇宙そのものが、姫巫女流の理<sup>ことわり</sup>。姫巫女流の力の源だ」

「何だと?」

実人は目を見開いた。

「雅……」

藍は驚いていた。彼女に降りている卑弥呼と台与が、雅の言葉に同調しているのだ。

『雅の言葉こそ、我らが流派の真の理です』

「そうなのですか……」

藍は雅がどうしてそんな事を知り得たのか、不思議だった。

「辰野神教が、例え縄文の昔から続いていようと、その祭神が、中生代から続くものだとしても、宇宙の広さと歴史に比べれば、短い」「そんな、バカな……」

実人は呆然としていた。

「ようやくわかったようだな、お前達の底の浅さが」

雅の言葉に、実人は頂垂れていたが、

「いや。まだまだ、まだ終われぬ！ この国を、そしてこの世界を統べるまで、我が辰野神教は続くのだ！」

と再び顔を上げ、叫んだ。

「懲りない男だ」

雅は哀れむように実人を見た。

「……」

藍は薫を抱き起こしながら、実人を見た。

遂に決着がつこうとしていた。

## 第十一章 陰陽の竜

遠野泉進とのおのせんしんは、崩れた祠の下を探っていた。

「この下に竜の本体がある。いかんぞ、雅。実人を挑発している場合ではない。早くケリを着けんと、竜が暴れ出してしまふ」

泉進が持っている恐竜の骨の振動は、さっきより大きくなっていた。

「辰野親子は竜を制御し切れていなかったのかも知れぬ。まずい事になりそうだ」

泉進の額に汗が滲んでいた。

安本は警視總監に直接掛け合い、機動隊と消防隊の協力を要請した。

「何が起こるかわからないのです。とにかく、できるだけ人を集めて下さい。お願いします」

安本は懸命に警視總監を説得し、ようやく了解を取り付けた。そして刑事達に、

「ここから離れて下さい。もはや貴方達の管轄ではなくなっていました」

「はア……」

刑事達も、夜空に浮かび上がっている巨大な竜を目の当たりにし、もう何も反論する事ができなかった。

「ぬづ？」

実人みひとは竜の動きが妙なのに気づいた。

「どつという事だ？ 何が起こっている？」

彼は驚いたように上空を見上げた。

「何、どうしたの？」

藍が実人の異変に気づいた。雅も、竜の気の流れが変化したのを

感じた。

「何だ？ 奴の制御を離れ始めているのか？」

竜がおかしな動きを始めたのは、薫の気を取り込んでからだった。「闇が閉じれば光が溢れる」

薫が不意に目を開けて呟いた。

「薫さん？」

藍はその物言いの不自然さに眉をひそめた。薫が喋っているのではないようだ。

「藍、霊媒だ。その女に、誰かの霊が降りて来ている」

雅が指摘した。実人もそれに気づいていた。

「おのれ……」

彼は何故か表情を険しくして、薫を睨んだ。

「実人、先程はよくも私を騙してくれたな」

薫は藍から離れ、実人に詰め寄った。

「何？ 誰なの？」

藍は雅を見た。雅は薫を見て、

「辰野真人だ。奴が自分の娘の身体を借りて、戻って来た」  
たつのまじこ

「ええっ？」

藍はびっくりして薫を見た。

「お前が私を陥れようとしている事はわかっていた。だからこそ、薫に仕掛けをしておいたのさ。お前が私を出し抜いて、私の意に沿わぬ事を始めたら、竜の暴走を引き起こすようにな」

薫の表情が兇悪になり、真人の霊が彼女の背後に浮かび上がった。

「そこまで気づいていたのか……」

実人は歯ぎしりして悔しがった。真人はニヤリとして、

「お前は最終的には、必ず薫の竜の気を使うと予測していたよ。その通りになって、私は嬉しくて仕方がない」

「あんたは一体何をするつもりだ？」

実人が叫んだ。真人は、

「知れた事。私は最早この世の者ではない。ならばこの世がどうな

ろうと構わぬ。竜が暴れ回り、世界を滅ぼすのも面白い」

「何だと？」

実人は薫に掴みかかった。しかし、真人は薫をサツと退かせ、  
「今更薫に何をしても無駄よ。自分の浅はかさを呪うがいい、実人よ」

と言い捨てると、薫から離れ、消えてしまった。薫はバツタリと倒れ伏した。

「くっ……」

実人は夜空の竜を見上げた。竜はすでに自分の手を離れてしまっている。どうする事もできない。実人は脱力のあまり、膝を着いてしまった。

「どこまでも愚かな親子だ」

雅がそう呟くと、藍は薫に駆け寄り、

「雅、竜は何とかなりそう？」

「今の段階なら、大丈夫だ」

雅がそう答えた時、泉進が戻って来た。

「いや、手遅れ寸前だぞ、雅」

「何？ どういう事だ？」

雅は泉進の言葉の意味が分からず、彼を睨んだ。

「祠の下に眠っている竜は、まだ全てが地上に出た訳ではない。まだ残っている」

「何だつて？」

雅はハツとして祠の跡を見た。たしかにまだ地下から気が吹き出している。

「何故だ？ これは一体……」

雅は啞然とした。すると実人が、

「あの男が、何かをしたのだ。この地の竜の気は、先程全て現出した。今地下で鳴動しているのは、別の竜の気。どこからか、集められたものだ」

「しかもどうやら、妖気を纏まとっているようだな」

雅が焦ったのは、その妖気を纏った竜の気があったからだ。つた。  
「陰陽の竜が揃ってしまつと、いくらこの剣でも、倒せない……」  
「えっ？」

藍はギクツとして雅を見上げた。

「この神魔の剣は、確かに無類無敵の剣。しかし、竜が陰と陽の力を備えてしまえば、神魔の剣も通用しない」

「でも、姫巫女流は……」

藍が反論しようとする

「いくら姫巫女流の理が最強だとしても、それは扱う者次第だ。陰と陽の竜が相手では、俺では無理だ」

雅らしからぬ、弱気な発言だった。

「そんな……」

藍は思わず竜を見上げた。上空の竜は、更に巨大化している。そして、地下の竜も、次第に地上に気を放出し始めていた。

「どうすればいいの？」

藍は卑弥呼と台与に尋ねた。

「剣を分けなさい、雅」

卑弥呼が言った。雅はハツとした。

「えっ？」

「早く分けるのです」

今度は台与が言った。

「わかりました」

雅は二人の女王の言葉に従い、剣を分けた。

「それぞれの剣の気を高めるのです。姫巫女の剣は陰の竜、黄泉剣は陽の竜を打ちなさい」

卑弥呼が言った。雅は藍に姫巫女の剣を返した。

「あ！」

藍が剣を受け取ると、藍が持っていた姫巫女の剣と、返された姫巫女の剣が一つになった。

「姫巫女の剣合わせ身です。更に強き剣となりました」

台与が告げた。確かに一振りだけの時より、輝きが増している。

「いかん、もう一体の竜が出て来るぞ！」

泉進が叫んだ。地面が揺れた。藍は雅と目配せし、薫を抱きかかえるとその場を離れた。

「お前にも力を貸してもらうぞ、実人！」

雅は打ちひしがれている実人に呼びかけた。

「あ、ああ……」

実人は力なく頷き、揺れる地面を走った。

「フオオオオオッ！」

咆哮をあげ、黒い竜が祠の残骸の下から飛び出して来た。大きさは実人が出した竜と変わらないくらいになっている。

「勝てるのか、こんな奴に……」

雅が呟いた。藍もそう思った。

「藍、少し時間をくれ」

雅はそう言うと、スーツと根の堅州国ねかたすくにに消えた。

「雅？」

藍は雅に何か策があると考え、剣に集中した。

「僕も力を貸そう」

泉進が剣の柄に触れた。すると輝きが増した。それに呼応するように、黒い竜が暴れ出した。

「この剣の変化に、奴が反応しているぞ」

泉進の言葉に、藍は黒い竜を見上げた。陽の竜は、まだ大きくなっている。

「お前の父親は、一体何をしていたのだ？」

泉進の問いに実人は、

「わからん。私は何も知らぬ。父がここまで裏を読んでいたことすら知らなかった」

「フン、間抜けな奴だ」

泉進は容赦がなかった。そして、

「雅め、何をしている！？ 陰と陽の竜が合わさってしまったら、

勝ち目はないぞ」

二体の竜は、互いに牽制し合いながら、上空へと飛翔して行き、グルグルと回り始めた。

「……………」

藍は不安そうに卑弥呼と台与を見た。

『雅を待ちなさい。それしかありません』

卑弥呼が諭すような微笑みで答えた。藍はそれに黙って頷いた。

「あ……………」

薫が意識を取り戻し、フラフラしながら立ち上がった。

「大丈夫、薫さん？」

藍が気遣って近づいた。薫は苦笑いをして、

「大丈夫です。それより……………」

と空を見上げた。藍も空を見た。竜はさっきより激しく回っていた。

「いかん！ もうすぐ一つになるぞ！ 二体の気が、混ざり始めている！」

泉進が叫んだ。藍はそれでも雅を信じ、剣に気を送った。

仁斎は、刑事達が去り、剣志郎と美月が救急車で運ばれて行くのを見届けると、

「安本、お前も原田と一緒に逃げろ。ここも危ないぞ」

と言った。すると安本は、

「とんでもない。ここは私の家と同じです。逃げる事はできません」

「私もです」

原田が身を乗り出して安本に同意した。仁斎は苦笑いをして、

「揃いも揃って頑固だな」

「それはお互い様です」

安本はニツとして応じた。

「僕は孫あひを助けに行く。ここより先は、僕らの領分だから、ついて来るのは許さん」

仁斎はそう言い置くと、安本と原田を残し、学園の敷地に入って

行った。

「理事長！」

原田はついて行こうとしたが、安本は、

「私達が行ったところで、足手まといになるだけですよ、事務長」

「はあ……」

不満そうな原田だが、いくら彼が強気でも、竜を相手に戦える訳ではない。諦めるしかなかった。

二体の竜は、互いに気をぶつけ合いながら、次第にその姿を変化させ、一つになり始めた。

「間に合ったな」

雅が現れた。彼の黄泉剣は、二周りほど大きくなっていた。

「妖気なら、あちらの方がたくさんあるのでな」

彼はその剣を中段に構えた。すると、その妖気に反応して、陽の竜が降下して来た。

「気に入らんようだな、この剣が？」

雅はニヤリとした。

「二段構えだ。俺はあの竜に仕掛ける。藍は黒い竜を押さえろ」  
「ええ」

雅は更に泉進に、

「ジイさん、藍を助けてくれ」

「言われるまでもない」

泉進はムツとした顔で答えた。すると、

「俺もいるぞ」

と仁斎がやって来た。

「お祖父ちゃん！」

藍が叫ぶ。薫が、

「私も力になれば……」

「お前は私に協力してくれ。竜に気を戻すのだ」

実人の言葉に薫はビククリした。

「今、私とお前にできるのは、それくらいしかない」

「はい、兄さん」

薫は涙ぐんで答えた。

「行くぞ！」

雅が飛翔した。そして、

「黄泉路古神道奥義、黄泉比良坂越え！」

と唱えた。陽の竜の周囲に、黒い空間が現れた。

「グオオオオッ！」

陽の竜は、その空間の影響で苦しみ始めた。

「竜を分けるぞ！」

雅は、陽の竜が何体もの竜の気で成り立っている事を見抜いていた。杉野森学園の竜の気、剣志郎の竜の気、薫の竜の気。これが完全に融合する前に、分断する事を考えたのである。

「そこだ！」

雅は、本体と剣志郎の竜の気の境目を見切り、黄泉剣で斬った。

「私も！」

藍も飛翔し、陰の竜に向かった。

「神剣乱舞！」

剣撃が黒い竜を斬りつける。

「フオオオオッ！」

光の剣撃を受け、黒い竜は苦しみ出した。しかし、そこまでだった。

「キヤッ！」

藍は黒い竜の尾の攻撃で、飛ばされてしまった。

「やはり、陰の竜は一つ故、手強いか」

仁斎はそう呟いた。

「だが、妖気を纏まとっているのなら、我が術も通じるな」

仁斎は神を取り出し、

「女巫女流古神道奥義、黄泉戸大神！」

と唱えた。光の結界が神から伸び、黒い竜に迫った。

「クオオオオツ！」

竜はそれを察知し、上空へと逃れたが、結界の方が速かった。

「グワアアアツ！」

陰の竜は、光の結界に縛られ、苦しみ出した。

「藍、そいつは剣撃では効かぬ。直接攻撃しろ！」

「わかった！」

藍は苦しんでいる竜に接近し、姫巫女の剣で斬りつけた。

「ガアアアアツ！」

竜は光の攻撃を受け、一部が解れたようになって、溶け出した。

「効いたの？」

藍は竜の様子を見て呟いた。

「藍、気を緩めるな！ そのくらいで消えてしまっほどの雑魚ではないぞ！」

仁斎が叫んだ。藍はハツとして、

「ええい！」

と更に斬りつけた。

「よし！」

雅は剣志郎の竜の気を分離する事に成功し、

「黄泉比良坂返し！」

と自ら生み出した奥義で、竜の気を根の堅州国に飛ばした。

「クオオオオオツ！」

身を斬られる痛みなどないのだろうが、陽の竜が雄叫びを上げた。

二体の竜が勢いを弱め、次第に下降し始めた。

「勝てそうだな」

泉進がホツとしてそう呟いた時だった。

「させぬーッ！」

光の竜の頭の部分に、真人の霊が現れた。

「何！？」

雅はギョツとした。泉進と仁斎もハツと息を呑んだ。

「父上！」

実人が叫ぶ。薫は啞然として何も言えない。

「何？」

藍も異変に気づいた。

「このような事で終わらせぬ！　せめて日本は我が道連れにしてくれる！」

真人は何かの祝詞のしとを唱えた。

「あれは……」

実人がグツと拳を握り締めた。

「何なの、兄さん？」

薫が訊いた。実人は真人を見たままで、

「縄文の昔から伝わる、竜寄せの祝詞だ。まだ抵抗するつもりなのか、父上は……」

「そんな……」

薫は竜の頭に取りついた父親を見て涙を流した。

「辰野真人、どこまで愚かな男なのだ！」

泉進が怒鳴り、印を結んだ。

「臨兵闘者皆陣列在前！」  
りんびようこうしゃかいじんれつさいぜん

彼は渾身の気の一撃を放った。

「無駄だ！」

竜の気が、それをあっさりと跳ね除けた。泉進は齒ぎしりした。

「おのれ！」

雅は真人に近づき、

「死人しじひとは死の国へ行け！」

「何イツ!？」

真人が雅の方を向いた時、彼の背後に工藤代議士と大野組の組長がいた。

「な、何と！」

真人は仰天した。工藤と大野は、無言のまま真人に掴みかかった。

「や、やめろ！」

抵抗しても、工藤と大野は真人のみに見える幻であるので、どう

する事もできない。

「何が起こっているんだ？」

それがわからない実人と薫は、父親の奇行を呆然として見ていた。

## 第十二章 決着

雅の編み出した奥義である黄泉比良坂返しにより、真人は幻に狼狽えていた。

「おのれ、貴様ら如きにこの私が！」

真人は工藤と大野の幻を何とか振り払おうともがいていた。

「何を慌てているのかわからんが、今だ」

真人は祝詞を唱え始めた。薫は只、父親の霊と兄を見比べるしかできなかった。

「藍、陽の竜は抑えた。陰の竜を止めてくれ！」

雅が叫んだ。

「わかった！」

藍は黒い竜に再び接近した。黒い竜も、姫巫女の剣で斬り裂かれたところから解れるように崩れているので、かなり弱まっていた。

「もう一太刀！」

藍は剣を振り下ろし、黒い竜を斬った。

「ゴオオオオオッ！」

黒い竜は姫巫女の剣の光を受け、のたうち回るように上空へと逃げ出した。

「待ちなさい！」

藍がこれを追う。

「何とか収まりそうだな」

仁斎は雅と藍を見て呟いた。しかし、泉進は、

「解せぬ。どうにも解せぬぞ」

「何だ、泉進？ どういう事だ？」

仁斎は旧友の言葉に眉をひそめた。

「それぞれの竜の気の総量が合わぬのだ。二体から消えた気の量と、辺りに漂っている気の量があまりにも合わぬ」

「何？」

仁齋も泉進の疑問の意味がわかり、ギョツとした。

「まだ何かがあると言っのか？」

「そうとしか思えん」

二人の老人は、額に汗を滲ませ、辺りを探った。

「まさか！」

泉進は慌てて祠の跡に走り出した。

「わかったぞ、仁齋！ 器だ。第三の器が、気を集めている」  
「器？」

「そうじゃ。器そのものが、気を集め、本体に取って代わろうとしておるのだ！」

泉進は祠の残骸を退け、下の土を掘り始めた。

「そんな事で追いつくものか、泉進！ 退いておれ！」

仁齋が怒鳴った。

「どうするつもりだ？」

泉進は退きながら仁齋に尋ねた。

「ここを吹き飛ばす！」

仁齋は十拳の剣と草薙の剣を出した。

「くっ……」

彼はそのせいで立ちくらみを起こした。

「大丈夫か、仁齋？ 剣二振りを同時に出すのは、藍ちゃんでないときついぞ」

「大丈夫だ。後もう少しだけ保てば良い」

仁齋は苦しそうに息をし、二つの剣を交差させた。

「姫巫女流古神道奥義、ながなきどり長鳴鳥！」

仁齋がそう唱えると、交差した剣から光が放たれ、祠の残骸の下へと吸い込まれた。

「この術は、天岩戸に閉じこもった天照大神を外に出した時に使われたとされる秘術。閉じ籠っているものを引きずり出すにはうってつけた」

「ほオ……」

泉進は感心したように頷いた。

「うおお！」

竜の気の流れる量が爆発的に増えた。

「これは、逆効果だったのではないか、仁斎？」

泉進が言った。しかし仁斎は、

「心配するな、泉進。ここには日本で最強の術者が揃っておるのだぞ」

「そうだな」

泉進はニヤツとした。

「来るぞ」

仁斎が構えた。泉進も構える。地鳴りがしている。それが段々と近づいて来ているのがわかった。

「ガアアアアッ！」

地面が吹き飛び、器が飛び出して来た。それは、地下に埋もれて、ずっとこの杉野森学園の地を守護して来た「竜」であった。恐竜の骨そのものである。骨の大きさから、肉食竜のもののような。

「そもそもこの土地を安定させていた存在であったが、あの親子のせいで乱れてしまった。ここまでおかしくされては、一度散らせて納め直すしかない」

「なるほどな」

泉進は納得して頷いた。

「な、何、あれ？」

藍は上空から恐竜の骨格標本のようなものに気づいた。

「くー！」

そんな隙を突き、黒い竜が反撃して来る。

「ええい！」

藍は剣を振るい、黒い竜を斬り裂いた。黒い竜はのたうち回りながら、地上に降下して行く。

「まだよー！」

藍はそれを追った。

「ぬっつう!？」

真人は遂に工藤と大野の幻に捕まり、闇へと吸い込まれ始めていた。

「おのれええ!」

彼は必死にもがいたが、幻の力はそれを上回っていた。

「こんなところで、こんなところでええ!」

真人の断末魔だった。彼は幻と共に闇に吸い込まれて消えた。

「何だ?」

雅はそれを見届けて、仁斎達の周囲の異変に気づいた。

「あれは……」

恐竜の骨が、命を吹き込まれたように動いていた。

「気が集まり過ぎて、おかしいものが力を得てしまったのか?」

雅は光の竜を無視し、骨の化け物に向かった。

「……」

真人は祝詞を唱えていたので、恐竜の骨には気づいていない。

「兄さん、また何か出て来たわ!」

薫の叫び声で、真人はようやく気づいた。

「あれは、この地の器だ。どういう事だ、器が本体になろうとしているぞ……」

真人は眉をひそめた。

「ガアアア!」

光の竜が、真人に襲い掛かった。

「!」

真人は自分の竜の気を放ち、戦わせた。

「薫、強く念じる。私の竜、私に戻れと!」

「ええ?」

薫は兄の言葉に動揺した。

「私は……」

彼女は、その力が嫌いだった。父真人が勝手に植えつけた竜の気。できれば、もうそんな物は背負いたくなかった。

「何をしている！？ 早くしないか！」

実人が怒鳴った。しかし薫は、

「私は嫌！ もう、竜なんかと関わりたくない！」

「何！？」

妹の拒絶に、実人は仰天した。そんな彼の一瞬の気の緩みを見逃さず、陽の竜が実人を攻撃した。

「ぐああ！」

実人は陽の竜の光の玉をまともに食らい、地面を転がった。

「兄さん！」

薫は、自分のせいで兄が怪我をした事に狼狽うろたえて、その場にしゃがみ込んでしまった。陽の竜は、次の標的を薫にした。

「グオオオオ！」

竜は一度上空に舞い上がり、薫目掛けて急降下して来た。

「力なき者に何をしているのだ！」

泉進の気が、陽の竜を弾いた。

「ガアア……」

陽の竜は、泉進を睨んだ。

「お嬢さん、逃げろ。あんたは標的にされる」

「で、でも……」

薫は倒れてピクリとも動かない実人を見た。

「心配するな、あんたの兄さんは死んではいない。早く！」

「は、はい！」

薫は走り出した。陽の竜は泉進を敵と看做みなしたので、彼女には見向きもしない。

「そつだ、化け物。儂が相手だ」

泉進はニヤリとした。

「何、一体？」

藍は、陰の竜の気が、恐竜の骨に吸い取られているのに気づいた。

「お祖父ちゃん、これは？」

「こいつが、二体の竜に取って代わろうとしているのだ」

「わかったわ！」

藍は剣を構え直し、骨の化け物に向かった。雅が叫んだ。

「藍、気をつける！ 完全ではないが、こいつ、陰と陽の力を備え始めているぞ」

「ええ？」

藍は空中で静止した。そして、気の色を探った。

「姫巫女の剣で光の部分を攻撃しても何もならない。闇の部分を見極めない」と……

彼女は拍手を打ち、目を閉じた。

薫は、安本と原田が待つ校門に辿り着いた。

「大丈夫ですか、お嬢さん？」

フラフラしている薫を安本が支えた。

「はい、大丈夫です」

薫は目に涙を溜めて答えた。

「中で何が起こっているのかね？」

原田が尋ねた。薫は、

「よくわかりません。地面から、恐竜の骨が出て来たのは見たのですが」

「骨？」

原田は安本を見た。安本にも、それが何なのかはわからなかった。

「臨兵闘者皆陣列在前！」  
りんびょうたつしやかいじんれつぎこぜん

泉進は気を放ち、竜を砕いていた。

「しかし、このままでは、あの器が成長するのみだ。何か策はないのか……」

光の竜は最盛期に比べて随分小さくなっていたが、その分骨の方が巨大化していた。

「泉進、気にするな！ 三体と戦うより、こいつ一体の方がやり易い」

仁斎が叫ぶ。泉進は頷き、

「わかった！」

とありつただけの気をぶつけた。

「ガゴオオオ！」

光の竜はのた打ち回りながら収縮し、地面に落下した。陽の竜は消え、その気の全てが骨の竜に吸い取られた。

「ガアオオオオ！」

骨の竜は吼えた。藍は目を開き、

「そこだ！」

と剣を大上段に構え、降下した。

「グオオオオ！」

骨の竜の巨大化に合わせるかのように、陰の竜が収縮して行く。そして陰の竜はのた打ち回った拳句、消滅し、その気が骨の竜に吸い取られた。

「グゴワアアア！」

骨の竜が、勝利の雄叫びを上げるかのように吼えた。

「斬！」

姫巫女の剣の光の剣撃が、骨の竜に突き刺さった。

「グオワオアアア！」

骨の竜は、ドドオオンと地響きを立てて倒れた。

「やった！」

藍が降下してきた時、ブウウンと風を巻いて、骨の竜の尾が飛んで来た。

「キヤアアアア！」

藍はその攻撃を食らい、吹っ飛ばされた。

「藍！」

仁斎と雅が同時に叫んだ。泉進が走った。

「くっ！」

彼は地面に叩きつけられる寸前の藍を受け止めた。

「あ、ありがとうございます、泉進様」

藍は赤面して礼を言った。泉進はニヤリとして藍を下ろし、

「何の、若い娘を抱き止めるのは、年寄りの楽しみよ」

「まア！」

藍はこんな時にも冗談を言う泉進に呆れた。

「おい、泉進、後で話があるからな」

早速孫の心配をしている仁斎が怒鳴った。

「グガガガ……」

骨の竜は、ゆっくりと起き上がった。

「やはりまるで効いていないか」

雅が呟いた。藍は竜を見上げて、

「そんなはずはないわ。こいつの陰の部分の核を叩いたはずよ」

「いくら核を叩いても、この化け物は総量が大きい。陽と陰の両方を同時に叩かないと効果がない」

雅が藍を見て言った。確かに骨の竜は、先程と何も様子が変わっていない。

「そんな……」

渾身の一撃が全く通じていないのを知り、藍は啞然とした。

「さつき砕いたはずの核が、元に戻っているな」

仁斎が言った。骨の竜は、相手の攻撃を見て、身体の気を移しているのだ。だから、完全な止めを刺すには、同時に何力所も攻撃するしかない。

「うつつ……」

仁斎は力が尽きたのか、剣を消した。

「お祖父ちゃん、大丈夫？」

藍がそれに気づいて声をかけた。

「大丈夫だ。少し疲れたただけだ」

仁斎は藍を見て答えた。

「フウウオアアア！」

骨の竜は雄叫びを上げ、動き出した。

「ここから出すわけにはいかん。泉進！」

仁齋が叫ぶ。泉進も、

「わかっておる、仁齋！」

と応じ、仁齋に近づいた。そして、

「エーイ！」

と気合いを入れた。

「オンマリシエイソワカ！」

泉進は、摩利支天まりしてんしんこん真言を唱え、隠形おんきょうの印を結んだ。彼の身体から

気が発し、骨の竜を縛り始めた。

「黄泉戸大神よみどのおおかみ！」

仁齋も、光の結界で骨の竜を縛った。

「ゴオアアオオオ！」

それでも竜はもがき、動こうとした。

「ならば！」

雅が進み出た。

「黄泉比良坂返し！」

闇が広がり、骨の竜の陰の気を吸い込む。

「黄泉醜女よもつしめ！」

無数の黄泉醜女が、骨の竜に取り憑く。骨の竜はそれを振り払い、

結界を振り解こうと暴れた。

「やるぞ、藍」

雅は黄泉剣を両手に出し、構えた。

「ええ」

藍も剣を上段に構えた。

「はっ！」

二人は同時に飛翔し、骨の竜の真上に出た。

「グオオオオアアア！」

骨の竜は、藍と雅に気づき、二人を攻撃しようとした。

「そうはさせぬ！」

泉進が更に気合いを入れた。仁齋も柙をもう一つ取り出し、縛りを強くする。

「同時に斬るぞ。いいな」

「はい」

藍は雅に呼吸を合わせた。骨の竜がもがいている。雄叫びを上げている。しかし、それも聞こえなくなった。聞こえて来るのは、雅の息遣いと鼓動。そして、自分の鼓動。

「今だ！」

雅が叫んだ。二人は全く同時に剣を振り下ろし、斬撃を放った。二つの黒い斬撃と光の斬撃が、同時に骨の竜に突き刺さった。

「グワオオアアア！」

骨の竜が苦しみ出した。

「もう一度だ！」

「はい！」

再び、四つの斬撃が骨の竜を斬り裂く。

「グオオオオオオ！」

骨の竜が崩れた。真ん中から亀裂を生じ、倒れて行く。

「ガアアアオオオオ！」

ズーン地響きを立てて、骨の竜は倒れた。シューシューと音を立てて、骨の竜が収縮して行く。

「やったか？」

雅と藍は地上に降り立った。仁斎と泉進もホツとし、互いの顔を見た。その時だった。

「グアオオオオ！」

突然骨の竜の頭が起き上がり、口から光の玉が吐き出された。その光は、上空へと逃れ、消えてしまった。

「逃げたのか？」

仁斎が夜空を見上げて呟いた。泉進は、

「しかし、あの量では何もできぬ。後は我らの子々孫々に委ねるしかない」

「そうだな」

仁斎はそう言ってニヤリとした。

「終わったようだな」

雅は藍を見た。藍はニッコリして、

「ええ」

と答えた。

気がつくと、東の空が明るくなって来ていた。長時間に渡る戦いはこうして幕を閉じた。

## エピローグ それぞれの思い

辰野親子が引き起こした「竜事件」は決着した。

安本の連絡で、再び現れた警察は、学園の敷地で死んでいる工藤代議士と大野組の大野組長、そしてその手下達の遺体を搬送するため、大型車両を伴っていた。

しばらく安本が事情を説明し、警察は引き上げた。

朝日が眩しい。藍は目を細め、また始まる今日という日を実感した。

「雅……」

彼女は今日こそかつての許婚である雅を引き止めようと思っていた。しかし、雅にはその気はないようだ。藍が近づくと、離れてしまふ。悲しくて、泣きたくなった。

「藍」

仁斎が声をかけた。藍は涙を拭って、

「何？」

仁斎は穏やかな顔で藍を見ていた。

「まだ待て。雅は椿との事をまだ清算し切れていない。もう少し、待て」

「うん……」

それはわかっていた。しかし、死んでしまった椿には永遠に勝てない。もどかしかった。

「それより、あの男の事はどうするつもりだ？」

「あの男？」

藍はキョトンとした。仁斎は呆れて、

「例え一時いっときとは言え、心の奥深くまで互いを繋いだ相手の事を、そうもあっさり忘れるのか、お前は？」

「あー！」

藍は剣志郎の事をすっかり忘れていた。そしてそれを仁齋に指摘されて、顔が破裂するのではないかというくらい、赤面した。

「わ、私……」

藍はシドロモドロになった。仁齋はニヤリとして、

「まあ、僕はその方が良い。彼奴はお前とは合わん」

「お祖父ちゃん！」

その言葉にはムツとしてしまう。剣志郎は良き友ではあるが、愛する人ではない。藍は改めてそう思った。しかし、剣志郎をきちんと評価しない仁齋の態度は許せない。

「お前自身、まだよくわからぬようだな」

「ええ……」

時間がかかる。雅が椿の死をまだ乗り越えていないように、自分は剣志郎との事を昇華し切れていないのだ。そう思う。

「それで良い。まだ若いのだから、焦って結論を出す必要はないぞ、藍ちゃん」

泉進が口を挟んだ。すると仁齋が、

「お前は用がすんだらさっさと出羽に帰れ、泉進」

「うるさいわい」

年寄りが一番元気だ、と藍は思い、溜息を吐いた。

「は、はは、は……」

全てが消失してしまった杉野森学園跡地を見て、原田事務長は乾いた笑いを漏らす事しかできなかった。安本もショックを受けてはいたが、

「事務長、建物はまた造れば良いのですよ。生徒達が誰一人被害に遭わなかった事を喜びましょう」

「理事長……」

理想に燃える安本と違い、現実主義者の原田は、大きな溜息を吐いた。

「藍さん」

薫が声をかけて来た。彼女は意識を失ったままの兄の実人を救急

車で運んでもらうため、その到着を待っているところだ。

「この度は、私の父と兄が、大変なご迷惑をおかけ致しました」

薫は身体が二つに折れるのでは、というくらい深く頭を下げた。

「いえ、私は別に……。むしろ、貴女のお父さんとお兄さんは、私達小野家の者が引き起こした騒乱に巻き込まれたのだと思います。詫びなければならぬのは、私達の方です」

藍の言葉に仁斎も頷き、

「そうだな。源斎、舞、そして建内宿禰たけしうちのすくねが引き起こした日本の気の乱れが、各地に及ぼした影響は計り知れん」

「ありがとうございます」

薫は涙ぐんで答えた。

「どうするつもりだ、これから？」

一人離れて立っている雅に、泉進がそつと近づいて尋ねた。

「まだ日本の気は乱れたままだ。収めねば、また同じ事が起こる」  
「なるほどな。ならば、儂の所に来い。お前に本当の気というものを教えてやる」

「いらん世話だ」

雅はそう言ったが、

「気が向いたら、顔を出す」

と付け加えた。泉進はニヤリとして、

「相変わらず、口が悪い奴よ」

「お互い様だ、ジイさん」

雅も泉進を見てニヤリとした。

「いつまで藍ちゃんを待たせておくつもりだ？」

泉進は真剣な顔で言った。雅も真顔になり、

「待たせているつもりはない。俺は死ぬまで椿に詫び続ける。だから、藍は待つ必要はない」

「おい……」

雅の頑迷さに、泉進は呆れてしまった。

「藍は俺のような一度黄泉路に足を踏み入れた人間より、本当に藍の事を思ってくれる人間とこれからを過ごした方がいい」

雅は、剣志郎の思いに気づいているのだ。だからこそ、尚の事藍の思いに答える訳にはいかない。

「ならば直接そう言え」

泉進が言い放った。雅は泉進を見て、

「俺もそれほど割り切れてはいない。仮にも藍は、許嫁だったのだ」と言つと、藍を見た。藍も雅の視線に気づき、彼を見た。

「また会う事もある」

雅はそれだけ言つと、根の堅州国ねかたすくにへと消えてしまった。

「雅……」

藍はしばらく雅が消えた場所を見ていたが、救急車の音に気づき、「薰さん、来たみたいよ」

と薰に声をかけた。

薰は実人の搬送を手伝って救急車に同乗し、その場を去った。

「さてと。儂らも行くとするか」

仁斎は泉進を見て言った。泉進は安本と原田に、

「災難だったな」

「いえ。皆さんのおかげで、他所に迷惑をかけずにすみました。ありがとうございます」

安本は泉進に頭を下げた。泉進は苦笑いをして、

「儂よりも、仁斎や藍ちゃん達に言ってくれ。儂は大した事はしておらんから」

「そうですか？」

安本は微笑んで応じた。

「また後でな」

仁斎は安本と原田にそう告げ、歩いて行つた。藍は安本達に近づき、

「この度は大変なご迷惑をおかけしました」と頭を下げた。すると原田が、

「本当に迷惑だった」

「事務長……」

安本が驚いて嗜め<sup>たしなめ</sup>ようとしたが、

「だから、責任を取って辞めるなんて言わせないよ、小野先生」

と原田は言い添えた。藍はビックリして、

「えっ、その、あの……」

機先を制されたため、彼女は言おうとしていた事を言えなくなっ  
てしまった。

「貴女は自分で思っているより、ずっとこの学園に貢献しているし、  
いてもらわなくては困る存在だ。もちろん、竜神君もね」

原田はニツとした。藍は苦笑いをして、

「ありがとうございます、事務長」

「私も事務長と全く同意見ですよ、小野先生」

安本が優しく微笑んで言った。

「ありがとうございます、理事長」

藍はもう一度深々と頭を下げた。

それから数時間後、学園跡地は大騒ぎになった。教職員には原田  
が連絡を取り、全校生徒には安本の自宅にあるコンピュータを使っ  
てメールを送信して、学園が災害で倒壊したと連絡した。保護者会  
や同窓会など、あらゆる組織が動き出し、学園が陰も形もなくなっ  
たのがマスコミに知れたのは、正午過ぎだった。各メディアが跡地  
から緊急報道をし、安本と原田は、その対応に追われた。

その頃、藍は剣志郎が入院している病院を訪れていた。

「藍さん」

ナースセンターで病室を尋ねていると、後ろから美月に声をかけ  
られた。

「あ、お母さん」

藍は振り向いて会釈した。美月はニコツとして、

「その響き、いいわね」

「は？」

キョトンとした藍だったが、自分が美月を「お母さん」と呼んだのを思い出し、赤面した。

「ありがとう、藍さん。見舞ってあげて。もうあの子も、意識がしつかりしているから」

「はい」

美月が先に立って歩き出し、剣志郎のいる病室に行った。

「おはよう」

美月は遠慮したのか、中には入らず、廊下に残った。藍はそれに気づいたが、仕方なく一人で中に入った。病室は個室で、剣志郎はベッドを起こした状態で、こちらを見ていた。

「おはよう」

彼はどことなく居心地が悪そうだ。

「大丈夫？」

藍が尋ねた。剣志郎は、

「ああ。一時は死ぬかと思っただけど、大丈夫だよ」

「そう。良かった」

藍の微笑みに、何故か剣志郎は赤面して俯いた。

「どうしたの？」

「いや、別に……」

剣志郎は、九州の病院での事を思い出したのだ。

「変なの」

藍は全く思い出していないので、剣志郎がどうして顔を下に向けたのかわからない。

「あのさ」

不意に顔を上げたので、覗き込んでいた藍が驚いて下がった。

「きゅ、急に顔上げないですよ」

「あ、悪い」

謝ってしまってから、どうして謝らなければならないのか、と不

満に思う剣志郎だったが、そういうところがいけないのかも知れないとも思い、

「俺、その、藍に言っていない事があって……」

「武光先生の事？」

藍はツンとして尋ねた。剣志郎はビクツとしたが、

「あ、ああ。俺、武光先生と付き合っている」

「フーン。それは良かったわね」

藍の言い方は酷く冷たかった。剣志郎はシユンとして、

「でも、彼女に悪いので、はっきり断わろうと思う」

「えっ？」

意外な言葉を言い出す剣志郎に、藍も驚いた。

「どういう事よ？ 貴方も武光先生が好きなんじゃないの？」

「いや、全然」

剣志郎は藍を見て答えた。藍はムツとして、

「それは酷いわ。武光先生が可哀想」

「そ、そうだよな」

剣志郎はまたシユンとしてしまう。でも何とか、

「俺、昔から、強引な女性には何も言えなくてさ。小学生の時も、

全然好きでもない子と交換日記してた」

「は……」

藍は呆気に取られた。

「それで？」

藍はしばらく剣志郎が黙っていたので、先を促した。

「あ、ああ。でも、そんな性格が良くないんだって、大学生の時思  
い知ってさ。好きでもない子に告白されて、好きな子に告白できな  
いで落ち込んでいる自分が嫌になった。だから、教員になろうと思  
った」

意味が分からない。藍はそう思った。

「何で告白できないと、教員になろうと思うのよ？」

鈍感なのか意地悪なのか、剣志郎は藍を見て考えてしまった。十

分伝えているつもりだったが、後もう一步と言つところに来ると、藍自身が蓋を閉じてしまったかのように、全く反応しなくなるのは、今まで何回もあった。

「好きな人が、教員になっていたから」

剣志郎は顔を赤らめて、藍を見つめた。藍もドキツとして剣志郎を見た。

「俺はずつと藍の事が好きだった」

初めてシラフの時に言われた。藍はすっかり気が動転していた。

「な、何よ、いきなり……。冗談？」

「違うよ。冗談なんかじゃない。杉野森学園で初めて出会ってから、ずつと好きだ」

「……」

ここまで真正面に告白された事はなかった。藍も高校や大学で、それなりに男子には人気があつて、どこまで本気なのかわからないような告白はされた事があつた。しかし、その頃の藍は今以上に雅との事を引き摺っていたから、誰から告白されようと心は動いたりしなかった。只一人、剣志郎を除いて。

「もう……」

藍は恥ずかしくなり、背を向けた。剣志郎は、大学時代に酔つた勢いで何度も藍に告白している。本人は覚えていない。だから藍も何回めからか、本気で相手をしなくなっていた。そして、剣志郎は自分をからかっているか、何かのゲームのつもりで言っているのだと思つようになった。

それでも、同じ職場になつて、武光麻弥という微妙な存在が現れ、藍も剣志郎を意識するようになった。そんな中で、九州の事件があり、二人は急接近した。だが、雅が現れると、藍の剣志郎に対する感情は振り出しに戻ってしまう。藍も悪いのだが、剣志郎も悪い。彼自身、雅を意識するあまり、卑屈になっていたからだ。だが、そんな繰り返しを打ち破ろうと、剣志郎は動いた。

「俺は本気だ。だから、お前もちゃんと答えてくれ。はぐらかさな

いで」

剣志郎は真つ直ぐに藍を見ている。藍は背を向けたままで、

「わ、私は……」

剣志郎は思わず唾を呑み込んだ。藍が振り返る。

「私は、その、えーと……」

顔が赤い。そんな藍も可愛い、などとにやけてしまう剣志郎は、

本当に「藍一筋」のバカである。

「おはようございます」

そこへいきなり武光麻弥が現れた。

「あ」

同時に口にする藍と剣志郎。

「小野先生、おはようございます」

「お、おはようございます」

藍はドキドキして答えた。剣志郎も嫌な汗をかいている。

「剣志郎さん、私全然知らなくて、ごめんなさい」

剣志郎さん……。いつの間にかそんな呼び方してたんだ……。藍

は麻弥をチラツと見て思った。そして、剣志郎が麻弥に何と云うか

確かめようと思ったが、

「小野先生、後は私が。どうもありがとうございました」

と麻弥に言われてしまい、病室を追い出されるように出た。

「……」

剣志郎が何も言えないのも情けないが、そんな結末にホツとして  
いる自分にも呆れていた。

（こんな関係、いつまで続けるのよ？）

自分自身にもどかしさを感じる藍だった。

「あら、藍さん」

美月が戻って来た。

「どうしたの？」

「はあ、武光先生がいらしたので、私、帰ります」

美月は苦笑いして、

「そうですか。わかりました。また来て下さいね」

「は、はい」

藍は美月に会釈して、廊下を歩き出した。

（まだ終わっていない。辰野神教の騒動は、始まりに過ぎないのかしら？）

藍は雅の言葉を思い出し、気を引き締めた。

確かに日本の気の乱れは収まっていなかった。何か起こる気配が漂っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8848i/>

---

ヒメミコ伝 太古の神

2011年5月7日12時40分発行